

Culture,
Energy
& Life

CEL

vol. 123
November 2019

特集

地域と時間をつなぐ

—「よそ者」の役割とは



移住者、訪問者、外国人……
 内とは異なる価値観を持つ「よそ者」は、
 社会に変化をもたらす存在として、
 古くから大きな意味を持ってきました。
 近年も地域活性の切り札として注目を集めていますが、
 たんに恩恵をもたらす者と捉えるだけでは
 不十分ではないでしょうか。
 地域と時間をつなぎ、これからの姿を考えていくなかで、
 外の視点を持つ「よそ者」の役割を見直す。
 今号では、そうした「よそ者」の可能性を検討すべく、
 さまざまな視点から考察を重ねます。

特集

地域と時間をつなぐ —「よそ者」の役割とは

- [インタビュー]
 02 **変わり続け、問い続ける、「異人=よそ者」という存在**
 赤坂憲雄 [学習院大学文学部日本語日本文学科教授]
- [インタビュー]
 08 **地域と「よそ者」が混じり合う場づくり**
 —息づくまちはいかにつながり続けるか
 細川裕之 [オルガワークス株式会社専務取締役]
 川幡祐子 [WeCompass 代表理事]
- [インタビュー]
 14 **“多主語的”なアジアが硬直した文化を突破する**
 黄國賓 [神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所長・教授]
 赤崎正一 [神戸芸術工科大学芸術工学部ビジュアルデザイン学科教授]
- [インタビュー]
 20 **コミュニティ・デザイン新論**
 —「包摂か排除か」を越えて
 川中大輔 [龍谷大学社会学部講師/シチズンシップ共育企画代表]
 新川達郎 [同志社大学大学院総合政策科学研究科教授]
- [インタビュー]
 26 **「関係人口」とは何か?**
 —その背景・意義・可能性
 小田切徳美 [明治大学農学部教授] =文
- [インタビュー]
 32 **新たなコミュニティを創造する「聖地巡礼」の面白さ**
 岡本健 [近畿大学総合社会学部総合社会学科准教授] =文
- [インタビュー]
 38 **移民が「よそ者」になるとき、ならないとき**
 高谷幸 [大阪大学大学院人間科学研究科准教授] =文
- [レポート]
 42 **人と地域を結ぶなにわの伝統野菜**
 —「玉造黒門越瓜“ツルつなぎ”収穫祭」レポート
- [レポート]
 46 **認知症の本質を知り、共に生きるために**
 —第2回「高齢社会2030を考える会」報告
- [連載]
 48 **私たちが考える万博**
 第2回 大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの
- [エッセイ]
 52 **奈良の倭の奴の国宝** 文=哲夫 [漫オコンビ・笑い飯]
- [書籍案内]
 54 **地域と時間をつなぐ「よそ者」の役割を考えるための10冊**
- [CELからのメッセージ]
 56 **「よそ者」の受容度が、日本の将来を左右する?** 田中雅人



表紙・裏表紙・扉/大阪市大正区
 泉尾にある築約65年の長屋を改修
 した「ヨリドコ 大正メイケン」。1階
 のシェアアトリエにクリエイターたち
 が集う。

浪花の十二月月 服部麻衣 [大阪くらしの今昔館学芸員]

変わり続け、問い続ける、 「異人」＝よそ者」という存在

地域・コミュニティをつなぐ存在として、今あらためて「よそ者」の力が注目を集めている。が、ひと口に「よそ者」といっても、そのあり方はじつに多様で捉えどころがない。ウチとソトを自在に行き来し、人と人の新たな結びつきを生み出す、「よそ者」の役割とは何か？ 民俗学者として早くからその存在に注目、その後は独自の「東北学」を通じて、異人・境界・排除などの概念をアキュラブルな視点から問い直してきた赤坂憲雄さんに、うつり変わる「よそ者」観、それがこれからの日本にもたらすものについてお話を伺った。

脇坂敦史 取材執筆
栗原論 撮影



インタビュー

「学習院大学文学部日本語日本文学専攻教授」

赤坂憲雄

Akasaka Norio

「ウチとソト」に
引き裂かれた自己を見つめて

『異人論序説』（1985年）を書いた1980年代半ば、私はちょうど30歳くらいでした。民俗学や国文学、宗教学や社会学、現代思想などさまざまなテクストのなかに「ウチとソト」「秩序と混沌」「清浄と不浄」「自己と他者」といった二元論を見出し、その境界や交わりに豊かな物語を発見しようとしたこの本は私にとって、さまざまな意味で出発点となりました。

私のなかには若い感覚として、自分が生きていることの窮屈さとか居心地の悪さがあり、それを解きほぐ

してみたかった。自分は「よそ者」（ストレンジャー）ではないか？という違和感。『異人論序説』のなかで繰り返し描いた、両義的な、「ウチとソト」に引き裂かれた存在としての「異人」（図1）には、そういう自分の不安定さが投影されていたと思います。

続編として『排除の現象学』（1986年）を書いたときにも、同じような感覚が色濃くありました。私の暮らしていた武蔵野は都市化の進む東京のウチとソトが接する境界として、「三億円事件」（68年）や「イエスの方舟事件」（79〜80年）など特異な事件の現場にもなりました。この本のなかでは、新聞をにぎわす

そうした社会問題の輪郭を描きながら、「排除の論理」を強めるコミュニティのあり方、それに追い詰められた異人たちのあり方を、さまざまな角度から考察しています。

たとえば、埼玉県の国有林に建設計画が進められていた自閉症者のための施設に、隣接するニュータウンの住民から反対運動が起きたという事件を取り上げました。現代にも通じる、先駆的な事例です。注目したのは、ニュータウン住民の過剰とも思える拒否反応に対し、もっと古くからそこに住んでいた「旧住民」の側がむしろ受容的だったという事実。すでにニュータウンという巨大な「異物」を抱え込んでしまった彼らにとって、新しい施設がひとつ増えても、それほど大きな問題ではなかったのです。さらに、地価や資産価値の低下といったニュータウン住民の懸念のなかに、いずれ自分と家族はその家と土地を売ってどこかに移住していききたいという、定住とは矛盾した願望があることにも驚きました。

「ウチとソト」「排除する側とされる側」の関係はこのように複雑であり、ねじれていて、常に当事者が引き裂かれている。それを丁寧に解きほぐすことは重要な意味をもっています。今でもそれは同じように感じています。

東北で出会った、
共同体の内なる「よそ者」たち

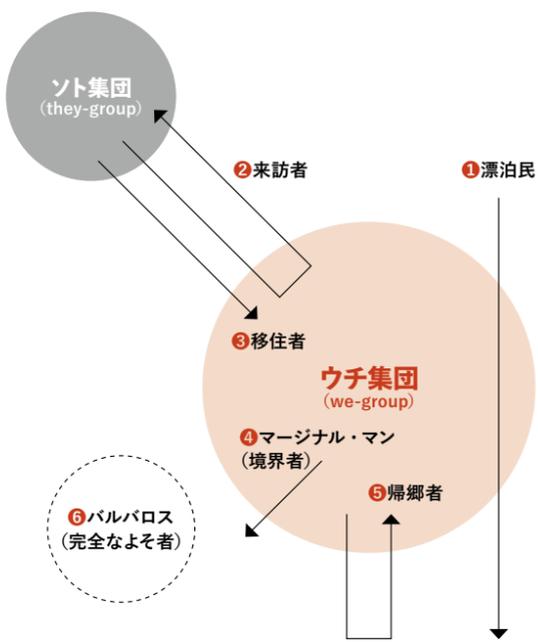
ふたつの著作を書くことで見えたことは、たくさんありました。ただ、どこかでそれを超えたい、そこで得た視点を崩したいという感覚も強くなりました。だから1992年に東北に新しくできた大学から「教員にならないか」という誘いがあったとき、私はふたつ返事でそれに乗ったのです。

東北を選んだ理由のひとつは、私の父がかつて福島県で炭焼きや山師[*1]の仕事をしていたことに関係します。父は生まれ故郷を追われるように東京へ出てきました。父の人生の背後に見え隠れしているものを、自分の目で確認してみたい。結果として、東北の村や町に入って聞き書きをするという仕事を20年間にわたって続けることになりました。

父や家族の話のなかには、田んぼというものが出てきたことがありません。くわえて、私が育った東京の武蔵野台地も畑作地帯。自分の原風景のなかには田んぼというものはない。後知恵ではありますが、それがやがて非水田的なものにこだわった私自身の「東北学」へとつながっていったように思います。

武蔵野は父のように故郷を捨てて移り住んできた人たちが大多数を占

■図1：「異人＝よそ者」のさまざまな形



『異人論序説』に掲載の、漂泊と定住から分類した共同体と異人（よそ者）の関係（一部改変）。①一時的に交渉をもつ芸能者・遊行の宗教者・渡り職人など、②行商人・旅人・巡礼者・赴任者など他集団からの訪問者、③移民・嫁や婿・転入者などの移住者、④掟を破った者など秩序の周縁に追いやられた人々、⑤故郷へ帰る旅人など外の世界からの帰還者、⑥共同体とは無縁の完全な「よそ者」。



める、いわば「移民の大地」です。成功者たちが屋敷を構える東京の中心部と違い、周縁化された「よそ者」たちが集まってくる。彼らは土地の歴史や文化についても知らないし、語らない。私を含め、武蔵野を故郷だと思っている人はあまりいないし、距離感があるのです。

だから、東北で「根っこがあった、その地に足をつけて暮らしている人たち」に話を聞くことが楽しかった。自分が安心して「よそ者」になれることにも、解放感があった。「よそ者」として村や町を訪ね、おじいちゃん、おばあちゃんの話聞く。土地ごとに祭りのある世界をあらためて知り、山野河海*2と交わりながら組み立てられている暮らしの風景はいいなあ、と心から思ったのです。

その後、東日本大震災の2カ月前に東北を離れた私は、約20年ぶりで武蔵野に戻ってきました。今もさまざまな形で東北とのつながりを持ち、東北に関係する仕事も続けていますが、離れてみて気づくことも多くあります。

思い返してみると、もともと土地の古い話は「村の旧家」や「根っこ」があって、その地に足をつけて暮らしている人たちがよく知っている、という一般的なイメージが私のなかにあったと思います。しかし、実は

そういう人たちの語る歴史というのは公式的で、かたよっていることも多い。だから意図したわけではないのですが、いつのまにか「よそ者性」を強くもつ人たちの話に耳を傾けていることが多かったんです。

最上川に面する小外川という集落に暮らしていた加藤さんという方も、そんなおひとりでした。1960年代以降に離村が進み、もはや2人の老人が暮らすだけだったその村は、消え失せる運命にありました。彼がそこに婿養子としてやってきたのは50年ほど前。しかし加藤さんが語るかつての村の姿には、中世以来の歴史をもつ「川の民」、川に漁る漁民が生きていました。それは、『奥の細道』でそこを通過した松尾芭蕉がけっして語ろうとしなかった「もうひとつの東北」でもあったのです。

とりわけ深く印象に残っているのは、女性たちです。考えてみると、女性たちの多くはよそから嫁入りしてそこにやってくる。結婚するとき、「もうお前は二度と帰ってくるな」と言われ新しい土地に移住してきているのです。

「〇〇さんの故郷はどこですか?」「〇〇さんにとって故郷は何ですか」という質問を投げかけると体が強ばってしまい、答えることができない。そんな女性に出会ったときのことは忘れられません。村社会におい

うイメージをもっていました。けれども今や、定住共同体が存在するという前提自体が幻想だと思った方がよいのかもしれない。

かつての東北では、家督を継ぐべき長男と次男以下の間に圧倒的な格差がありました。長男以外が家に残った場合は「おじ」、女なら「おば」と呼ばれ、薄汚い格好で働かされて馬小屋に寝起きしていたりする。私にとってそれは、今村昌平監督の映画『楢山節考』(1983年)で左とん平さんが見事に演じていた利助という男のイメージです。彼は村人から「くされ」などとさげすまれ、中年になっても童貞の彼は日々性欲に悩まされていきました。

しかし時代が下がると、高度経済

で、そもそも女性は「よそ者」であり続けていたのだ、と気づきました。彼女たちにとっての故郷はまさに、引き裂かれていたのだと思います。

東北の小さな村といっても、均質ではない。入ってきたばかりの人もいるし、家族のなかに村を出てしまった人があることも多い。私のような「よそ者」にとって最初はみんな「村の人」ですが、それはこちらが気づいていなかっただけです。東北は、私の父のように村を捨てて都会へ出ていった人たちはもちろん、北海道や戦前の満洲、ハワイへ移民したという家族も多く、そこから帰ってきた人たちもいる。

民俗学においても、従来は『漂泊と定住*3』という対比的な二元論を語ってきましたが、それほど単純な図式では語り尽くせないグラデーションがあったのです。

共同体を出た者は不幸になる、という「呪い」

たしかに、今も地方で発言権をもっているのは、代々その名が村に伝わっているような「定住者」でしょう。そしてそこには、掟に従わない者、「よそ者」を排除するような論理も強く残っています。実際には「よそ者」が出たり入ったりするのが当たり前なのに、なぜそれを覆い隠すような「定住の村」というイ

成長期の集団就職などで、そういうマジナル(境界・周縁的)な存在は次々と外へ出ていってしまう。なかには、都会で功成り名を遂げて村に帰ってくる者もいます。逆に、残された長男は家屋敷と田んぼがあっても嫁は来てくれずに鬱々としていたり。今では、関係は完全に逆転してしまいました。

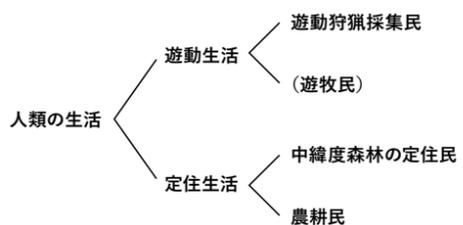
地域社会が人を縛る力というのは、「掟を守り、やるべきことをやれば、必ずお前を助ける」という関係です。柳田国男の言葉を借りれば、それは「村の共産制」であり、メンバーとして入会地*4の利用権をもたなければ、村で暮らしていくこともできません。

そういう共同体の力は、今や壊れてしまったにもかかわらず、吉本隆明さんが著書『共同幻想論』(1968年)などに言うところの「恐怖の共同性」はなおも人々を脅かし続けている。それは「ここを出た者は必ず不幸になる」という、ある種の「呪い」です。その呪いは、今も繰り返しかけられているのです。

「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へ

人類学者の西田正規さんが面白いことを語っています。人類が「遊動」から「定住」へと生活のスタイルを大きく変えた「定住革命」の始

■図2：遊動から定住による生活様式の変化



遊動から定住への革命が起こったことで、人類は新たな問題と直面し「逃げられない社会」を構成することになった。出典／『人類史のなかの定住革命』西田正規

中世までの日本の社会は、移動する人たちの多い世界だったと思います。少しずつ定住性の強い村がつくられていきますが、歴史学者の網野善彦さんが描いたように、それはまだ漂泊性の高いコミュニティでした。網野さんは『無縁・公界・楽』(1978年)という本のなかで、そんな中世をある意味で「希望」として描かれていると思います。共同体の隙間にアウトローたちの小さなユートピア(アジール)聖域、無縁の者が集う場)が生まれており、そこに自由があったというようなイメージです。

しかし戦国時代を経て、近世の定住的な共同体はよそからくる人たちにに対し、ある種の差別的なまなざしをもちます。つまりは1万年ほど前ですが、それは「逃げられる社会」から「逃げられない社会」への転換であるということです(4頁の図2)。

たとえば死体をどこに埋葬するか、ゴミをどこに処理するかというのは、定住とともに人類が初めて直面した問題です。集団のあり方についても、同じことが言えます。遊動する人たちは、離れる、分かれる、去る、捨てる……離合集散というものを当たり前に受け入れていました。ところが、同じ場所に住みつづける社会においては、さまざまなトラブルが起こるし、嫌な人間とも一緒に暮らす方が食べものが少ないとか、そういうことが見えてしまう世界では、掟やしきたりをつくり、メンバーの欲望をコントロールしなければ共同体が壊れてしまう。「逃げられない社会」は、そのようにつくられていったわけです。

同じように、『異人論序説』のなかで私が描いた定住と漂泊のせめぎ合いも、この大きな1万年のスケールで考えてみると、ちょっと違って見えないだろうか。西田さんの『人類史のなかの定住革命』(原題『定住革命』、1986年)を読んで、私は「逃げられない社会」が今、柔らかなく壊れはじめているのではないかと、思うようになりました。もちろん、

それは数百年というような長い時間の単位で、気がつくともうなっていないというような話ですが、インターネットのような匿名性の高い世界が存在し、そこに仮想通貨が流通しはじめた現代の遊動的なネットワークは、さらに広がることはあっても消えてなくなることはないでしょう。だから、たとえば学校やいじめから逃げてはいけないと思ひ込まされ、自殺を選んでしまう子どもたちを見ていると、「逃げてもいいんだよ！」と言いたくなる。今、私たちのひとりひとりが逃げられる強さをもち、逃げる人に対しても寛容なあり方を見つつけようとしている途上だと思ひます。

東日本大震災の後には、私を含めて多くの人が、原子力発電所に代表される大都市型の中央集権的なシステムの限界を感じています。代わりに再生可能エネルギーのような循環型の地産地消的システムをつくっていくしかない——そのような考えから、福島県会津で酒屋の社長をしていた私の友人の佐藤彌右衛門さんが、小さな再生可能エネルギーの会社をつくりました。大企業の人たちからは「再エネは雇用を生まない」と言われながら、さまざまな手法で資金を集めてつくったその小さな会社は、1、2年で20人近くの地元雇用を生み出すようになり、今は会津の地に

なくてはならない存在にまで育っています。

かつての村には、志や思いを共有する人たちが応援し合う形でお金を出す「頼母子」や各種の「講」[*5]というシステムがあり、柳田国男はそこに「村の共産制」の痕跡を見ました。今ならネットを通じ、その仕組みを内から外へと開かれた形で再編していくこともできる。それだけですべてがまかなえるわけではないにせよ、遠くにいる「誰か」が利益をすべて奪っていったり、「誰か」がすべてを抱え込んだりする形ではなくなりません。

海も川も太陽も風も、誰のものでもない。ある意味で、それは先にあげた「入会」です。柳田もまた、そういう協同組合的な考え方を広めようとしていた人物であったことは、あまり理解されていません。ネットを通じた現代の頼母子から始まる、新しい地域社会の仕組み。それも排他的に閉じるのではなく、「よそ者」に対しても徹底的に開かれた形をもたせる——そういう試みが今、あちこちで小さな新しい風景をつくりつつあると感じています。

従来の「閉じられた社会」と「開かれた社会」という対比の上に、「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へ、という大きな歴史の流れを重ね合わせる。すると、すべ

るのです。うまくいかないと嘆くよりも、成功例をつくっていった方が早い。私も遠野市で「つなぎ役」をしながら、そういう若者たちが残れるための場所をつくり、ささやかに応援していこうと思っています。

遠野にもむかし映画館があったのですが、私はその古いビルのことがずっと気になっていました。10年くらい前までフィリピン・パプなどが入っていたという建物を借りて、私たちは「遠野文化倶楽



遠野でも「地域おこし協力隊」の若者による活動が静かに、しかし確実に浸透しつつある。「to know (トゥーノウ=遠野)」と題した一連のプロジェクトでは、東北の地域文化を現代に生きる人々の糧とすべく企画やデザイン、ツーリズムを数多く実施。遠野中学校1年生130人に向けた講義では「遠野の魅力」を共に考え(上)、遠野の民俗と伝説に触れるツアーには県外からも多くの参加者が訪れた(下)。写真提供/富川岳

てが「自分ごと」として考えられるのではないのでしょうか。今、そういう新しい意識をもち、企業のみならず窮屈な思いをするよりも自分で生きることを選びたい、と地方へ向かう若者たちが増えています。

遠野市で現代のアジールをつくる試み

私が関わりをもっている岩手県遠野市のような地方都市にも、大都市からやってきたそんな若くて優秀な人たちがたくさんいて、とりわけ30代の女性の活躍が目立ちます。なかには国立大学の大学院を卒業して一流企業や官庁、海外協力隊などで働いた経験をもつ人もいます。いわゆる「ロスジェネ世代」である彼らはインターネットを駆使し、自分がやりたいことを受け止めてくれる土地がどこにあるのかを徹底的に調べ、遠野のような町へやってきます。「逃げられない社会」に入れてもらえなかったというマイナスの意識ではなく、みずから積極的に、覚悟を決めて地方を選ぶ人たちが現れているのです。

たとえば2009年度に総務省によって制度化された「地域おこし協力隊」として、多くの若い人たちが全国の自治体に派遣されています。これは地域外の「よそ者」を積極的に受け入れ、地域協力活動を行っている場所が、いたるところにつくられるようになれば、日本も変わっていくでしょう。

多様性を柔らかく受け入れるためのレッスン

私が「東北学」を通してやろうとしていたのは、閉じられたイメージで語られることの多い東北を、開かれたものとして捉え直すことでした。それは日本がもつ複数性、多様性を柔らかく受け入れるための「内なる異質性」と共存していくためのレッスンでもあったと今では思っています。個人も地域も、そんなレッスンを地道に繰り返すことで、外の人の、外の世界ともうまくつながることができるのではないのでしょうか。

海の向こうの台湾や朝鮮半島、中国や東南アジアとの関係づくりに、かつての日本は失敗したと思います。もしかしたらその原型が、これまでの東北との関係のなかにあるかもしれない。あるいは北海道のアイヌ、沖縄の歴史にもあるかもしれない。そういう連続したグラデーションのなかで現実を見ていくことが、これからさらに多様な「逃げられる社会」を生きるうえで大切な学びになるのではないのでしょうか。ウチにしろソトにしろ、もはや「閉じたアイデンティティ」ではやっていけない。では「開かれたアイデンティ

もらい、その定住・定着を図ることが目的ですが、残念ながらうまくいっていないことも多い。

彼ら若者たちを眺めている地域の人たちのまなざしというのが、「よそ者」として20年を東北で過ごした私には、痛いほどわかるのです。つまり2年、3年という限られた時間のなかであれば、「やんちゃ」をしても泳がせておく。面白いじゃないか、と言ってもらえる。けれどもある一線を越え、地域社会の「利権構造」にまで触れてしまった瞬間、手のひらを返したように切り捨てられてしまう……。

でも私は、そういう若者たちを本当の意味で取り込んで、生かしている村や町しか、もはや生き残ることはできないだろう、と思います。

民俗芸能が好例です。村が衰えていくと担い手がいない。「よそ者」にもそれを解放し、かつては「穢れ」とされた女性にも入ってもらわないと続けれない。実際、若い女性たちが仲間に入ったところは、よみがえっています。じいちゃんたちにしても、彼女たちが仲間になってくれれば嬉しいし、その喜びがきっかけになり、どんどん「よそ者」を受け入れて元気になる。

その意味で、「地域おこし協力隊」も使い方ひとつだと思います。彼らがいなければできないこともたくさんあり、「テイ」は、どうやってデザインしていくことができるのか？

そうした大きな関心のなかで私は今、自分が育ったこの地域の風土や歴史をしっかりと捉え直してみたいと考え、「武蔵野学」に取り組んでいます。「よそ者」ばかりが暮らすこの武蔵野という地域を、いわば自分の故郷としてしっかりと描いていくこと。そういう意味で、私はいまだに『異人論序説』のなかで発した若き日の問いかけの影響下にいるのかもしれない。

注

- *1 山を歩き回って立木の売買や鉱脈探しを行う職業のこと。
- *2 定住民により耕作、貢納が行われる荘園や農地を取り巻く山や原野、川や海。
- *3 農耕を基礎として一カ所に定住する人々に対し、山の民や川の民、芸能者、行商人、遊行の宗教者など、一所不住の人々が漂泊者とされる。
- *4 村などの共同体全体で所有した土地で、薪炭や肥料用の落ち葉を拾う入会の山などのことを指す。
- *5 頼母子は構成員である個人や法人が定められた金品を払い込み、融通し合う金融の形態で、主体となる相互扶助的な団体や会合が講と呼ばれた。



赤坂憲雄
あかさか けんお

学習院大学文学部日本語日本文学専攻 准教授。1953年生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教養部教授、同東北文化研究センター所長を経て2011年から現職。「東北学」をはじめとする独自の視点から幅広い執筆・発言を行う。著書に『異人論序説』『排除の現象学』(ともにちくま学芸文庫)、『東北学/もうひとつの東北』(講談社学術文庫)、『性食考』(岩波書店)、『武蔵野をよむ』(岩波新書)など多数ある。

地域と「よそ者」が 混じり合う場づくり

—息づくまちは いかにつながり続けるか

「地域におけるよそ者の役割」を考えるにあたって、ひとつの事例を紹介する。
舞台は2017年にオープンしたシェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」。
大阪市大正区泉尾にある築約65年の長屋「小川文化」を改修し、クリエイターのための住居・店舗付きシェアアトリエに再生したそのプロセスは、よそ者が、地域で紡がれてきた物語や知恵を尊重し、長期的な目線で、丁寧に地域と関わろうとする姿勢がうかがえるものであった。

インタビュー

【オルガワークス株式会社専務取締役】

細川裕之 Hosokawa Hiroyuki

【一般社団法人大正・港エリア
空き家活用協議会(WeCompass)代表理事】

川幡祐子 Kawabata Yuko

加藤しのぶ=取材・執筆 宮村政徳=撮影



小川文化再生物語——プロローグ

物語の舞台となる地域の話から始めよう。大阪西部に位置する大正区は、江戸期の新田開発などで造成された海と川に囲まれた区域である。明治期には区内に大阪紡績会社(現・東洋紡)が創業、大阪の紡績産業の発達を牽引し「東洋のマンチエスター」と呼ばれる原点ともなった。戦後、紡績産業衰退後も中小工場が立ち並ぶ「ものづくりの町」として発展してきた。また、大正期よりその働き手として沖縄からの出稼ぎ者を雇い入れたことから、現在も沖縄出身者が多く、沖縄物産店や料理店が軒を連ねることも知られている。

この大正区内に昭和30年代前半に建てられたのが、物語の中心となる2階建重層長屋「小川文化」だ。

「昭和30年代から高度成長期にかけて、大正区内



2棟ある長屋のうち右側(北棟)をリノベーションし誕生したシェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」。2階が住居、1階が店舗付きシェアアトリエになっている。「古い建物はカッコいいものだ」と知らせたい思いから、屋根に使われていたトタンを2階の壁に使ったり、古材をはりめぐらせていたり。



1階入り口のショップから奥を覗くとアトリエ部分が広がる。仕切られていた壁面を取り払うことで長屋の特長を生かした奥行きのあるつくり。



ショップには、オリジナリティあふれるカラフルな革小物、刺繍がアクセントのユニークなTシャツや可愛いイラストの手描きスリッポンなどデザイン性の高い作品が並ぶ。

には工場労働者向けの木造賃貸住宅(長屋)が多く建てられました。南棟と北棟の2棟の長屋が並ぶ『小川文化』もそうした住宅のひとつでした」と川幡氏。川幡氏は、「まちの住宅をよくしたい」という思いのもと、住まいを軸にしたまちづくりの仕事に携わり、現在は大正区や港区にある空き家活用をワンストップで相談に応じる専門家集団であるWeCompassの代表を務めている。

川幡氏によれば、大正区全体で工場の縮小や廃止によってこうした賃貸住宅の空き家が年々増えており「小川文化」も、ことに北棟は10年以上賃借人がいない状態が続いていたという。いざれ壊して建て替えるか更地とするかで見られていた長屋である。そんななかオーナーが代替わりすることになった。

「古いけど、カッコいい」——3代目オーナーとなった小川拓史氏は、老朽化が進んでいた「小川文化」を見た時、素直に思ったそうである。仕事

「ヨリドコ 大正メイキン」は、JRR大正駅から歩いて約15分、商店街にほど近い、おだやかな暮らしの息遣いが感じられるまちにある。

道路に面した元長屋の側壁部分を入り口にして、正面から見るとごちゃまじりした印象の建物だ。しかし、白壁に窓を大きく取った1階部分と、古いトタンをめぐらした2階壁面との意匠の対比が味わいを醸し出しており、通りすがりについ足が止まる。誘われるようにガラス越しに中を覗くと、壁を取り払った奥行き深い空間が目に見え、さらに周りには何やらつくっている人の姿、いたるところにディスプレイされた、商品と思しき品々——見るほどに「気になる建物」なのだ。

この建物の再生に携わった主要人物は、すべて大正区外出身、つまりよそ者だという。そこで、プロジェクトにあたった主要メンバーのうち、アトリエの運営に携わるオルガワークス株式会社専務取締役・細川裕之氏と、プロジェクトのプロデュースを担当した一般社団法人大正・港エリア空き家活用協議会(WeCompass)代表理事・川幡祐子氏に、改修にいたるまでの経緯や実作業について、またその後の展開までさまざまなお話を伺った。

おふたりに訊く「小川文化再生物語」から、「地域でよそ者が面白いことを始めた」という表層にとどまらず、地域の歴史を尊重し、長期的な目線をもって取り組んだ場づくりのプロセスをひも解いていきたい。

地域に新たな光を見いだす、 よそ者の視点

小川氏はまず、友人でイラストレーターの神吉奈桜氏に、現在もわずかながら入居者がいる南棟の空き室に住まないかと持ちかけた。兵庫県たつの市で築100年ほどの、戸も閉まりかねるような家に住んでいた神吉氏は、小川氏の「前の住人の荷物が残っている部屋だが、自分で片付けからするならばいいよ」との誘いに乗ったものの、想像以上の荷物の量と老朽化の進み具合で、とても住める状態ではなかったという。

快適とは言いかねる環境での暮らしを楽しんでいる神吉氏ならばと小川氏が見込んだからとはい

で東京と大阪を往来していたが、大正区を訪れたのは初めてだった。それなのに、どこか懐かしさを感じるまち。そして「カッコいい」と思った家をどう活用するか。物語はそこから動きはじめた。



改修工事前の「小川文化」。特に北棟は誰も住んでいない廃墟となっていたため外も中も荒れ放題だった。



「耐震改修見学会」では、施工担当が耐震改修方法を説明。また「耐震補強計画の説明会」では、耐震設計者と工務店の話のほか、隣棟住人による大正地区と長屋暮らしの良さについても聞くことができた。

え「今考えると、ひどい話ですよ」と笑う細川氏。小川氏とは20代の頃から付き合いがあり、デザイン業のかたわら「単にモノではなく、人を育てたり、能力を引き出すような人自身をデザインする仕事」に興味を持つようになり、小川氏のシェアリングビジネスの仕事を手伝うようになったそうだ。現在は仕事でもパートナーという関係だ。

「女手ひとつでは無理だと思った神吉さんは、自身のフェイスブックで片付けを手伝ってくれる人を募ったんです」（細川氏）

ネズミの糞が転がっているような南棟を人魚棟と命名し、前向きに奮闘する神吉氏のSNS発信には多くの人が反応し、意外な人も声をあげた。当時の大阪市大正区長であった筋原章博氏である。現在港区長を務める筋原氏は大阪市職員から区長となり、人口減少が進む大正区を何とかしたいと自ら精力的に働きかける名物区長だ。空き家活

になれるかどうか。そういう価値観ならば、『縫製』をもう少し噛み砕いて、制作の場を探すクリエイターたちの拠り所になる場をつくってはどうかと言いました」

細川氏のアドバイスをきっかけに、クリエイターが集う住居・店舗一体型のシェアアトリエにしようというコンセプトも決まった。資金的には回収に10年かかるような、ビジネスモデルとして型破りな提案だが、「以前、小川と一緒に北区にシェアオフィスをつくったことがあり、それが数年かけてじわっと成長してきた。そういうビジネスモデルがすでにできていたので、それをもちこんだ」そうで、大きな不安はなかったようである。先のシェアオフィスを「ワーキングする拠り所」ヨリドコ「ワークキン」としたこともあり、ここは「大正区でメイキングする拠り所」ヨリドコ「大正メイキン」と命名された。

よそ者から地域に関わっていくために

実際の工事は、暑い盛りの7月から始まった。そこで川幡氏に作業にあたって大切にすることを、地域との関わりを中心に訊いてみた。

川幡氏によれば、今回のプロジェクトにあたり細川氏からの意見が「工程はすべてオープンに見せよう」だったそうで、そのための取り組みを考えたという。

「ハード面については、この建物が耐震診断と劣化診断を経て改修をしていることは大きいですが、費用はかかっても、安全であることは大切ですから。行政が支援すべきだと判断するのもその部分なんです。それを一般の方にも知っていただくために、耐震改修現場の見学会を開催しました」

用問題にも積極的に取り組んでおり、『彼女を助けられるのは僕だろう』と、本当に現場に駆けつけてくださった。それからは、地域課の方や区のプロモーション担当者などを連れて来られて、区全体で、ひとつの長屋を住めるように手伝ってくださったんです」（細川氏）。

つながりはさらに広がっていく。大半が高齢者であった南棟のほかの住人と神吉氏との交流が始まり、神吉氏が主宰する絵画教室などを通して地域とも付き合うようになった。徐々に人魚棟がまちに受け入れられていく様子を見て、小川氏は「この2棟長屋が若い人と高齢者とのコミュニケーションの場所にならないか」「そこで高齢者から若い人に引き継げるものはないか」と考えるようになる。そこで思いついたのが、空き家のまま朽ちるのを待つかのようにあった北棟の再生だ。しかし、ハウスメーカーやリフォーム会社など関連業者に相談するも、口を揃えて建て替えを勧

マニアックな見学会、せいぜい10人程度の参加だろうという予想をはるかに超える60人近い参加者が集まった。若い参加者が多く、耐震や安全性への興味の高さがうかがえたそうだ。

さらに内装を業者に一任するのではなく、「DIYワークショップ」という形で一般からの参加を募ったそうである。ワークショップはふた通り。ひとつは一般参加者向けとして、古い建物の良さを生かすために、撤去した古材の再利用や壁のエイジング加工などを工務店店主に教わった（計4回、約30人参加）。もうひとつは、サポーター向けに5戸ある2階住戸の内装の企画とDIYを公募して行われた（計約50人参加）。一般参加者向けのワークショップは、川幡氏からの発案を小川氏が快諾し実施に至ったという。

「2階住戸」は、内装の企画とDIYを実施するグループを公募し進められた。デニム柄の塗装や撤去した土壁を活用した部屋など5戸それぞれが異なったイメージに仕上がった。



ワークショップの参加者には「まかない料理」がふるまわれた。料理づくりは神吉氏のご家族や地域の人びとも手伝うなど、お互いの理解を深めるうえで良い交流の場にもなった。



クラウドファンディングで一部資金を募ったが、目標以上の120万円が集まった。その成功報告会やトークショーなど直接情報を開示する場が多数設けられたことも特徴的だ。

められた。それでも諦めきれない小川氏は、大正区に相談、そこでWeCompassの川幡氏を紹介されるのである。

空き家の活用にはクリアすべきハードルがたくさんある。ことに耐震性を有しない建物の場合、事前に耐震安全性や劣化度のチェックははずせない。「小川文化」北棟は、耐震診断、劣化診断を受けたうえで耐震改修を行うこととなった。後に小川氏はあるインタビューで、当時の思いを次のように語っている。

「この物件には未来があるって、なぜか勝手に思い込んでいたんです」

未来がある——地域における新たな光をよそ者である小川氏が見いだし、それに賛同するよそ者たちも関わり、地域とつながりはじめたのである。

クリエイターたちが「住み」「働く」ことができる拠り所として

耐震改修後の北棟をどう活用していくか。当初、小川氏は縫製工場をつくらうとしたそうである。大阪が紡績産業で発展し、このまちに工場があった歴史を踏まえ「まだ今なら、おじいちゃんおばあちゃんが蓄積されている技術を継承できると考えられたようです」（川幡氏）。同時にその構想が現実的なものかどうか、小川氏自身が悩んでもいたという。そこに打開策を提案したのが細川氏だ。「小川には、ビジネスというよりはソーシャルな観点で、縫製の現場の人たちをどうにかしたい、という思いがありました。このプロジェクト後に会社（オルガワークス）を立ち上げて仕事をするようになりましたが、打ち合わせでも、儲かるかどうかという話はまず出てこないんです。新規に何かを始める時の判断基準は、関わる人全員が幸せ

オーナーさんが実際につくってみる場を設けたかった。そうすれば、区内で同じような木造住宅をもつ家主さんが自分でやりたいと思えばやれやすから。また、サポーター向けのワークショップは、今後の空き家再生におけるサポーターの育成を行いたいという意図がありました。実際にはインターネットコーディネーター仲間、建築系専攻の大学生、DIY好き社会人などのグループが参加し、1室ずつ担当しました。おかげで2階住戸は、5戸それぞれに違う表情を持つ部屋に生まれ変わりました」

ワークショップだけでも画期的な試みだが、ユニークなのはその際にまかない料理が出されたことだ。

「暑い盛りのワークショップでしたから、せめて食事の時は皆でワイワイ話しながら、『ここはどうしたらいいですか』と相談したり、『今度手伝いに来てもらえませんか』などと頼めるような交



オーナーの小川氏の想いを受けとめたプロジェクト開始時の参加メンバーたち。イラストレーターの神吉氏や今回お話いただいた細川、川幡両氏などよそ者たちが中心となりコトが動いていった。



アトリエは中央部分の共有スペースがあることでクリエイターたちによるコラボ作品も生まれやすくなっている。また入居者全員でアトリエのプロモーションリーフレットなども作成。「ここを自分たちの暮らしの一部として捉え、ここを愛し、愛されるにはどうすべきかをすごく真剣に考えられていることに、僕ら運営側も励まされます」と細川氏。

流の場にしたかったんです」

同時に、SNSなどでの工事過程の発信も行った。担当は神吉氏である。

「どういう形で工事を見せていくかという話になって、神吉さんが『工事の過程を漫画に描きま』と。それも人間の裏側を。神吉さんは、『建築家が立派なものをつくりましたというだけだと応援する人が増えない。建築家といえどもがいていて失敗もする。できあがるまでに苦労している様子を見せた方が皆が応援してくれるだろう』と、私たちが悪戦苦闘する様子を描いてくれました(笑)」

神吉氏の目論見通り、SNSを通して数百人の人が工程を見守ってくれた。また、大正区も折々広報で紹介してくれたそうで、「公民連携といいますが、これだけしっかり関わってくださることはあまりないことで、有り難かった」という。ほかにクラウドファンディングなど、さまざま

達を連れて、『ここでひと声かけたら奥まで行ってええねん』と言ったり(笑)」
入り口に大きな窓ガラスを入れ、外から中が覗けるようにしたのは、ここが小学校のスクールゾーンにあたっていても関係しているそうだ。「子どもたちが、中でのものをつくっている様子を見て、将来ものをつくる人になりたいと考える人も出てくるかも、という願いも込めています。実際、覗いてくれるだけでなく、ボールをおいかけ、ヒューッと敷地内を自由に走り抜けていきます。今後は、小学生を迎えるイベントもしたいと考えています」

では入居者、つまりここをものづくりの場として活用するクリエイターから見た、「ヨリドコ 大正メイキン」はどうなのだろう。

「ここは基本的にパーソナルスペース同士が重なっているので、お互いに干渉し合うし、迷惑をきちんとかけ合える距離感があるのです。細長いので、それをきっちり分けたり壁をたてるよりも、通るだけでも『ごめんね』と声をかけたりするよ。うな、外の人が中の人とコミュニケーションをとらないと楽しめないのと同じように、お互いに迷惑をかけ合いながら、見えないルールをお互いに築いていくことが必要になってくるんです。この場が自分に合うと感じる人が自然に入居されていると思います」

現在、1階シェアアトリエの契約クリエイターは6人、ほかに2階のアトリエ兼住居に3組。地元大正区内から通う人と、1時間以上かけて通勤する人が半々という割合である。全員がここに入居して良かった、と言う。「ものづくりに専念する場ができたことで、自宅をつくっていた頃より集中できる」他のクリエイターから刺激を受け

まな形で周知をはかっている。話を訊いていると、この再生プロジェクトが、行政をはじめ、地域さらには一般の人々を実に巧みに巻き込んで進められていったかがうかがえる。それは沖縄県からの移住者を早くから受け入れてきた歴史をもつこのまちだからこそ、うまくかみ合った面もあるのかもしれない。

多くの人が関わった改修工事は11月に無事完了し、2日間の内覧会が開かれた。当日の印象を細川氏は次のように語った。

「実は内覧会の時はずごく不安だったんです。地域の方に、『ヨソモンがきてオシャレなもんつくっても俺には関係ない』とか、『昔の方が良かった』とか言われたらどうしよう。けれど、実際は自分たちにとって何十年も思い出にあるものを残そうとしてくれたと喜んでくださった。『昔、この2階に友達の家があつて、遊びに来たことがある』と思ひ出話をしてくださったり。2

たり、コラボなど新しい取り組みができる」など、大切な「ヨリドコ」となっているようだ。

エピソード

おふたりに今後取り組みたいことを伺った。川幡氏は、ひと口に空き家の再生利用と言っても先述の通りクリアすべきことも多いことを踏まえ、実現可能な方法を提案していきたいと言う。

「このまちは、小さな工場と、その工場の隣で定食屋を営むといった、仕事と住居が一体化した小商いをしている人が多い地域です。これからやりたいと考えているのは、住宅の一部分でいいので、空きスペースを貸してもらうことです。そうすれば片付けや改修といったハードルが下がりますし、それを家賃や、ちょっととした小遣い稼ぎにすることもできます。また、お金儲けより地域に役立てたいという家主さんも、少しずつですが相談にきてくれるので、それをもっと行政などに伝えていきたいと思います。そういう選択をする人が今後増えればまちも変わっていくって、より面白くなっていくと思います」

リノベーションや再生してきた建物をどうするかなど、あまり他例を見ないようになっているという細川氏は、場づくりや、「ヨリドコ 大正メイキン」のこれからについて「意図的に海に沈めた難破船」にたとえる。

「難破船が沈んでいたとして、そこにいきなり魚がわーっと集まることはありませんよね。必然的な循環が生まれて、生態系ができるようになるには当然時間がかかる。ヨリドコも同じです。ここにこういう場ができて、周りがどういう反応をして活用していくのかという、自然の反応の方に興

日間で5、600人の方に来ていただきましたが、地域の方が多かったのが印象的でした。ここが残っていくことで地域を元気づけることになるなら、それはよそ者にしかできないことなのかもしれません。よそから来た人が客観的にこの地域を見て、未来を感じる面白い場だと思うから、お金をかけてでもつくりたいと思ったわけですから」

コミュニケーションを通して「混じり合う」場に

完成したシェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」1階アトリエの特徴は、壁を取り払った開放感にあらう。入り口を入ると土間があり、段差をつかったアトリエ部分が続く。細川氏によれば、極力境をつくらない設計を依頼したそうである。「どうしても建物の中と外というだけで、外に対する排除感というのが強く出てしまうので、お客さんが入り口を越えたら、自分が感じる『自分が入っていいところ』まで入っていきける、フリーな感じをつくりたかったです。たとえば土間というのはここまで入っていいよねという目印になります。では、そこからアトリエ内に1歩上がるのはどうか。そこを上がったら、奥まで行っているのかどうか。確かめるためには、必然的に声をかける必要がある。中に入った人と迎え入れる人が、コミュニケーションをうまくとらないことには、この空間の中で心地良く過ごせない。コミュニケーションというのとはとても面倒なことなので、そんなことが必然的に起こることで、中の人と外の人が混じり合います。1時間前までは外の人間だと思っていた方が、思いきって中に入り1時間過ごすことによって、当事者のひとりとして感じられる。次に来る時はまるで当事者のように友

味があるんです。ここが形になるための自然な成長のしかたというのがあると思うので、そこを大事にしていきたいと思っています。どちらかというと、『実験』という感覚の方が強いですね(笑)。実際には、ここをひとつのリノベーションや空き家活用のショールームとして開放しながら何も閉ざさずにすべてオープンにしていくことを大事にしています。この場の専門的な評価を受けられるようにするのは自分たちの役割だと思っていますから、価値を保ち続け、さらに高めていきたいと考えています」



川幡祐子
かわはた・ゆうこ

一般社団法人大正・港エリア空き家活用協議会 (WeCompass) 代表理事。民間の都市計画系コンサルタントで、住宅政策分野の調査や計画策定に従事。2006年から大阪市立住まい情報センターで、専門家団体、NPOなどとの協働によって住まいまちづくりに関する普及啓発活動を実践。大阪市住宅供給公社企画事業課にて公的賃貸住宅でのリノベーション、団地再生事業に従事した後、現職。

細川裕之
ほそかわ・ひろゆき

オルガワークス株式会社専務取締役。2013年、個人デザイン事務所「TENG Meister」を立ち上げて独立。その後同社役員を兼任。「コト・場・ヒト」に関心をもち、シェアオフィス「ヨリドコワークキン」や、シェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」の企画運営を手掛けるようになる。クリエイターをサポートする、ビジネスコンサルティングやイベントプロデュースのほか、地域再生につながる教育やまちづくりへの関わりも広がっている。

“多主語的”なアジアが硬直した文化を突破する

文化とは古来、国や地域、世代に固有のものであると同時に、たがいの影響関係のなか、新たなかたちへ常に変わり続けているという面も、見逃すことができない。近年は、日本の大学や大学院へ留学してくるアジア系の若者が急増しているが、そこでの教育は西欧を規範にした近代日本文化の一方的な押し付けになってはいないだろうか。たんなる知識や情報、技術や資格の伝達にとどまらない、相互の吸収と学びへの試み、デザイン教育によりアジアと日本の新たな絆を築く、ひとつの創造的な挑戦を取材した。

インタビュー

[神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所長・教授]

黄國賓 Huang Kuo-Pin

[同大学芸術工学部ビジュアルデザイン学科教授]

赤崎正一 Akazaki Shoichi

大山直美=取材・執筆 宮村政徳=撮影



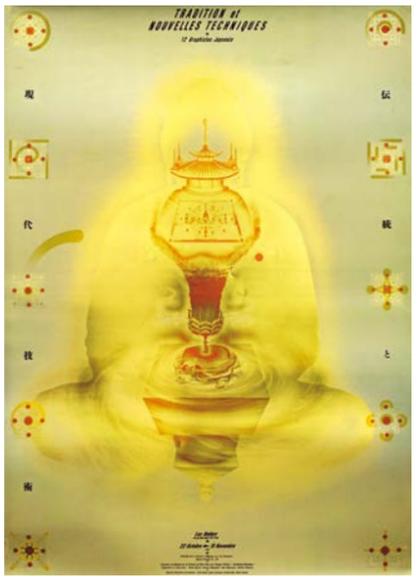
の流れをくむドイツのウルム造形大学で教鞭を執った経験が、直接のきっかけだったと思います」

太極図のごとく ——自らの内なるよそ者の発見

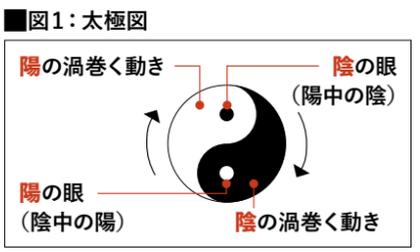
バウハウスは戦前期のドイツにあって、現代デザインの基礎をつくった教育機関であり、当時のウルム造形大学はその最も先端的な継承の場。若き杉浦さんにとって、何よりの憧れの場所でもあった。

が、その憧れの場所で、杉浦さんは大きな違和感に遭遇する。赤崎さんによれば、それは杉浦さんが自らのなかに、近代欧米のデザインや思想と相容れないものを発見した瞬間だったという。

これはインタビューなどで何度か語られていることだが、当時、杉浦さんはウルムの学生にしばしば自分のアイデアについて「ヤー・オーダー・ナイン」（イエスカノーカ）、つまりいいか悪いか、



フランスで開催された「伝統と現代技術——日本のグラフィックデザイナー12人展」(1984年)に出品されたポスター。杉浦康平の代表作のひとつであり、アジア的な空間と時間がモダンデザインの極致と融合した象徴的作品(イラストレーション=渡辺富士雄、デザイン協力=谷村彰彦)。



陰と陽という渦巻くふたつの力。一方、それぞれの内には「陽中の陰、陰中の陽」が存在し、循環と調和のダイナミズムを生み出しているという。

日本—アジア—欧米という文脈のなかで

日本とアジア各国は、長い歴史のなかでたがいに刺激を与え合ってきた。日本の高等教育機関に在籍する留学生の9割をアジア圏出身者が占める[*1]。昨今、大学のキャンパスもまた、よそ者同士の交流の場といえるかもしれない。そうしたなか、デザインを軸に、アジアの若者たちが各国の伝統や文化を学び、知恵や情報を交換する場を目指してつくられた、ユニークな研究所が神戸芸術工科大学にはある。

その名も「アジアデザイン研究所」。今も現役のグラフィックデザイン界の重鎮で、アジア画像学研究の第一人者としても知られる杉浦康平さんが中心になって約10年前に設立された。現在、杉浦さんの後を受け継いで同研究所長を務める黄國賓さんと、杉浦康平さんのデザイン事務所出身で同大学教授でもある赤崎正一さんに、アジアデザイン研究所が育ててきたさまざまなつながり、果たしてきた役割について話を伺った。

「アジアデザイン研究所は大学や大学院とは切り離された独立した研究組織で、杉浦康平さんが一貫して展開してきたデザインワークから画像学に至る、アジア的なものへの関心と、それに対するアプローチから生まれた独特の研究の場と云っていいでしょう」

そう語るのには、ご自身も同大学の3期生で、大学院で博士号を取得した杉浦さんの研究室出身の黄さん。一方、長年にわたり杉浦さんと行動を共にしてきた赤崎さんは、そうしたアジアに対する関心の出発点を次のようにみる。

どちらか言ってくれと求められ、おおいに迷ったそう。そこで、そのたび「フェライヒト」(英語の Peitah ² たぶん、こうだろう)と、東洋的な曖昧さをのぞかせつつ答えていたところ、「パーハプス先生」といういささか揶揄的な異名を贈られたという。

「そうしたなかで杉浦さんは、ヨーロッパ的なものの見方と自分の内にあるものとのズレを強く感じたんですね。近代デザインは、日本人のなかにもそうとう深く根を下ろしていますが、はたしてそれ以前にわれわれの根っこはないのか。今でこそ多くの人が気づきはじめていることに、最初に、しかも非常に若い時期に疑いを持ったのが杉浦さんでした。いわばヨーロッパの他者の立場から近代デザインを相対化し、もっと過去から続いていたアジア的な基準のなかで、デザインのアイデアや思想を探究しようとしたわけです」

それは、アジアを代表するシンボル「太極図」の思想とも通じるかもしれない。太極図は陽と陰のふたつの力のあり方を示すが、両者は対立というより循環・調和の関係にある。しかも両者には「陽中の陰、陰中の陽」といって、たがいの力の一部が内在し、これが全体としての循環と調和をもたらず起動力になっているという(図1)。

すなわち、自分をどちらか一方に固定するのではなく、常に揺れ動く存在として捉えること。日本のデザイン界を牽引してきた杉浦さん自身も、若かりし頃に自分の内なる「よそ者」を発見したことが、デザインの方向性を大きく変えるきっかけになったというのは興味深い。個人や国のアイデンティティや文化のあり方には、自己(自我)中心主義を超えた内なる他者の発見が重要な意味をもつのだ。

「西欧近代のカウンターとしての『多主語的』アジア」

「18世紀以降、世界はもっぱら西欧的な近代文明の洗礼を受けてきました。その間、戦争や紛争や飢餓は絶えることなく、今なお地球のいたるところで起こっています。一方で、近年は中国や韓国やインド、あるいは東南アジア諸国なども急速な発展を見せていますが、このままでは西欧と同じ近代化の道を進み、自分たちの大切な伝統や精神性は破壊されかねない。われわれ東洋人には、西欧的な自己（自我）中心主義とは大きく異なる『多主語的』な考え方があります。今の世の中の困難な状況を変えるには、そうしたアジア的な思考をヒントに、可能性を探っていくべきではないか。そうした考えから、この研究所はつくられたのです」

黄さんの言う「多主語的」とは、たとえば作品には当然のごとく自分だけの署名を入れ、我ひとりを主語とするような西欧に対し、デザインも美術も個人を超えた多くの無名の人々すべてが主語になり、時代を超えて受け継いでいく——そんなアジア特有の発想だという。それはまた杉浦さんの思想の根本であり、アジアデザイン研究所の基本的な考え方を象徴するキーワード「一即二即多即一」あるいは「而二不二（二にして一）」という言葉にも通ずるものがある（図2）。

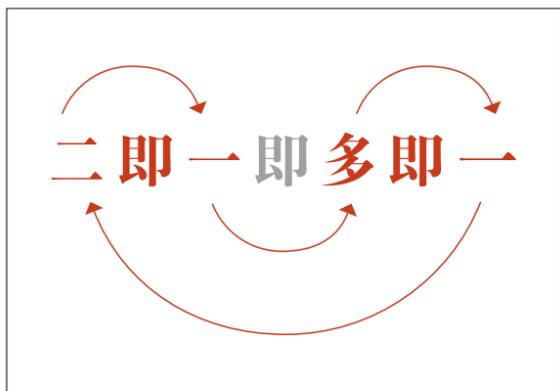
もともとアジアには、ふたつ（以上）に見えるものも実はひとつであるという考え方が古くからあった。たとえば太極図に見る陰と陽、天と地、日と月といった一対の密接なつながり。私たち自身の体にしても右半身と左半身のふたつに分かれるが、手を合わせればひとつにつながる。西欧の

ように自分と他者を画然と分けて考えるのではなく、つながり、混沌、それらを含めた大きな流れのなかで物事を捉える『多主語的』な見方が重要ということだ。

「多主語的な関係というのは、仏教学者の鎌田茂雄さんが言う『因陀羅網』にも通じます。『華嚴經』『3』に書かれたこの宝の網は、ひとつの点を持ち上げると無限にあらゆる点からみ合っただけでつながる。Aという点を中心にすれば、Bは伴（脇役）ですが、Bを中心にすれば今度はほかの点が伴になるという具合に、主従の関係はその都度変化しつつ、すべての点に関係していることに変わりはありません。このように常にたがいに共創的であるというのが、多主語的な関係といえるでしょう」

こうした考えを基礎に、アジアデザイン研究

■図2：一即二即多即一



すべてのものは「一」であり、「二」であり、「多」でもあり、同時にまた「一」でもあるという思想。一見矛盾し合うものが、溶け合い、一体化する発想は、西欧的自己（自我）中心主義とは異なる「多主語的」考え方だ。

「日本だけでは見えない、文化の源流を探る試み」

これらアジア的な思考方法は研究所のみならず、黄さんや赤崎さんが指導する学部・大学院でも研究の基本姿勢となり、これまでに展覧会、講演会、シンポジウム、出版など、多様な形で研究の成果が発表されてきた。

たとえば、アジアデザイン研究所の設立準備期間から開設直後にかけては、瀬戸内海沿岸に残るきらびやかで豪壮な「太鼓台」とそのルーツとしての「山車」をテーマに、アジア文化圏に共通



の祭礼装置のデザインに着目、アジア各国の研究者との密度の高い意見交換を行った。こうした独特の宇宙観や神話が色濃く反映された山車の造形は、日本だけでなく、中国、バリ、イラン、インド、タイなど、アジア各国で見られるという。この研究成果は、のちに『靈獣が運ぶアジアの山車——この世とあの世を結ぶもの』（工作舎刊）として出版されてもいる。

「アジアの文化は多く源流を共有して、インドから中国、韓国、そして日本に渡ったものがたくさんあります。今、日本には、民俗学の視点から祭りを研究している方は大勢いますが、デザインや造形の視点から掘り下げている人はほとんどいない。日本という狭い範囲だけを対象にしていたのでは、アジア全体に及ぶ巨大な流れを捉えられないので、じつはこれは重要な視点です。たとえば文字で書かれた文献がなくても、デザインや形からわかることがある。よそ者同士としか見えなかったアジア各国が、たがいの内にある異文化を発見し合うことで、共通の表現の手法が見えてくると



太鼓台の模型。実物の太鼓台は、大きいもので高さ5.5メートル、長さ12メートル、重さ6トンにも及ぶ。4本柱のヤグラの内に太鼓を置き、上方に布団（ふとん）を重ね、巻きつけて逆三角形にした形態は仏教の宇宙観における須弥山をかたどっているという。

というのが、私たちの研究所の基本的な考え方であり、このようなユニークな研究をしている大学は、日本でもここだけだと思います」

黄さんの言葉を受けた赤崎さんは、この山車の研究について次のように分析する。

「杉浦さんは、山車のデザインは仏教の宇宙観において世界の中央にそびえるという須弥山の形から来ていると想定しました。黄さんの言葉どおり、それを文献で証明することは不可能なので、アジア各地の多様な事例を集めては、想像力によってイメージを涉猟し、図像的・造形的な類似性を発見していったんです。初めは非常に個人的な関心と気づきから始まった研究が、シンポジウムなどで語り合われ、本にすることで、人と人、国と国、文化と文化を結びつけ、体系と広がりを生み出していく。そういう場として、アジアデザイン研

「異なる時代、地域、技術との出会いが創出するもの」

黄さんによれば、現在、大学院の修士課程・博士課程あわせて89人、黄さんが担当している大学院生は9人いるが、うち8人を中国人が占めている。ここでも他大学と同様、おもにアジア各国の学生が刺激を受ける場として、日本の教育・研究機関が選ばれているというのが現状のようだ。では、同大学院に在籍するアジアからの留学生



神戸芸術工科大学が中心となった、2019年度の日中韓台4大学国際総合プロジェクト「都市景観形成地区 奈良町の保存と活用の可能性」発表イベントのためのポスター。提供/神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所

は、実際にどのような研究をしているのだろうか。研究室の学生たちは「文化とデザインの関係」を基本に、さまざまな個別のテーマを掲げて研究を行っているという。

たとえば、ある学生の卒業論文のテーマは「魏碑書体の研究とフォント」。4世紀から6世紀にかけて栄えた北魏の時代の石碑に書かれた文字の書体が魅力的だと着目し、碑文の拓本などの材料を収集・分析したうえで、自分なりに400種類の文字を再現した。将来は、これを汎用できるようフォント化することを目指しているそうだ。

一方、「中国の木版年画」について研究した学生もいる。かつての中国では新年を迎えるにあたり、吉祥や寿を表す絵「年画」を木版画印刷の手法でつくり、家のあちこちに貼る習俗があったが、現在はすたれ、職人も減少。すべての版が手彫りのため、コストが高いことも衰退の一因だ。そこで、この学生は伝統文化を存続させるにはコストを下げる方法を編み出せばいいと考え、最新

対立と対峙を超えた「而二不」の関係へ

こうした大学間のネットワークが生まれた背景には、杉浦さんが所長を務めた時代から同研究所が中国、韓国、台湾のデザイナーたちと交流を重ねてきたことが大きく貢献している、と赤崎さんは言う。人と人のつながりがさらに大きなネットワークを構築するというあり方は、まさに「多主語的」だ。留学生たちの多くは神戸芸術工科大学にアジアデザイン研究所があることを知ったうえで、同大学・大学院への留学を志望してくるといい、設立約10年を経て、同研究所はデザインという領域におけるアジア各国の「ハブ」として大きな役割を果たしているといえるだろう。

一方で、残念ながら近年の日本とアジア各国との関係は、いい意味での「よそ者」として刺激を

のレーザーカッターで木版をつくる表現手法にたどり着いたのだ。

「卒業時には、自分でデザインした年画の大作を制作しました。レーザーカッターなら細部も表現できるし、出来栄は手彫りの年画の最高レベルにも匹敵します」と教え子の成果をたたえる黄さん。先のフォントもレーザーカッターも、たんに現代の技術を駆使してデザインするというだけでなく、伝統文化を研究し、それをどうすれば継承できるか、考察を重ねたうえで形にした点に大きな価値がある。ここでもまた、自らの内なる異文化に「よそ者」がかりに、新たな価値を生み出すという作業が行われている。

もうひとつ、大学院生が参加して年1回行っている「国際総合プロジェクト」についても、黄さんが2019年度の研究例を紹介してくれた。このプロジェクトは日本、中国、韓国、台湾の4大学が合同で開催しており、今年で10目を迎えたという。4つの大学のいずれかがホスト校となり、地元の特地域で見学、調査、フィールドワークなどを行い、地域社会の課題を発見。それを解決する提案を研究発表会で報告するというもので、今年には神戸芸術工科大学がホスト役を務め、都市景観形成地区に指定された奈良市の旧市街「奈良町」の町並み保存と活用の可能性を考察したという。

報告書には、4校の学生5人を基本に編成されたグループごとに、国籍や大学、専門分野を超えたさまざまな提案が展開されている。景観になじむ電柱や標識のデザインを考えたり、居住者のプライバシーを守りつつ観光客と住民をつなぐ場のあるまちづくりを構想するなど、提案自体も興味深い。それ以前に、相互のコミュニケーション

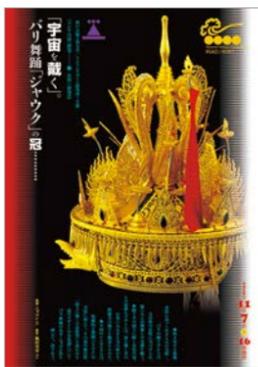
と与え合っているとはいいたい。こうした状況を打破し、ある種の絆が構築されるような関係を築くには、何が必要なのだろうか？

黄さんによれば、そこでもやはり大切なのは「アジアの多主語的な考え方」だという。「赤崎先生や私は大学で教えるかたわら、本を中心にデザインの仕事をしていますが、本を作るには編集者をはじめ、文章を書く人、イラストを描く人、写真を撮る人、印刷する人など、たくさんの方が関わっています。さらに、できあがった本を売る人もいて、最後には買って読む人がいる。自分だけが主人公で、ほかはすべて脇役——というのではなく、誰もが主語になりうるし、たがいに重なって層をなすように、絆を構築しているのです」

社会情勢によって留学生数に多少の変動はあるものの、アジアデザイン研究所を擁する神戸芸術工科大学を目指し、今後も大勢の学生がアジア



この10年間、各国の研究者たちと共同で行ってきた研究はアジア全域をカバーし、その対象もじつにさまざま。その成果はシンポジウムや各種メディアを通じて発表され、内外の注目を集めている。提供/神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所 (17頁、18頁とも)



を通じて学生たちが大きな刺激を受けたであろうことは容易に想像がつく。

「アジアのほかの国の先生や学生が町を見ると、やはり日本人が見ているものとは違うものが見えてきますから、日本人だけで行うプロジェクトとは違った成果が得られます。今は報告書を奈良市長に提出して、採用できる案があれば検討してもらえよう準備を進めているところですよ」と黄さんはプロジェクトの展望を語る。

各国から訪れ、それぞれ個別のテーマを掲げて意欲的に研究を行う。その多彩さが、西欧的なものにとつて「よそ者」であるアジア独自の力強い歩みへとつながっていくかもしれない。たんに対立・対峙する関係ではなく、たがいが内なる他者「陽中の陰、陰中の陽」を意識し合う「而二不」「二即二即多即」の発想によって、日本とアジア、そして世界との新たなつながりを生み出す。今日、グローバルとナショナルの間で揺れる「文化」の新しいかたちは、その先にこそ見つかるはずだ。

注
*1 独立行政法人日本学生支援機構「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」より。
*2 ドイツ工作連盟(DWB)は20世紀前半に設立され、多くの建築家やデザイナーによってモダンデザインの礎を築いた団体。パウハウスの中心人物ヴァルター・グロピウスもDWBに参加していた。
*3 仏教の經典のひとつで、極小の一点の中に全宇宙が存在するという、独特の空間・時間認識を説く。ちなみに、因陀羅すなわちインドラとは帝釈天(たいしやくてん)のことを指す。



黄國賓
ファン・クオピン
神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所長。同大学院芸術工学研究科教授(2016年より)。芸術工学博士。1967年生まれ。97年、神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科総合デザイン専攻修了。2005年、同研究科博士課程修了。同大学院工学研究科を経て、2018年より現職。



赤崎正一
あかさき・しゅういち
神戸芸術工科大学芸術工学部ビジュアルデザイン学科教授。1951年生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1976〜96年、杉浦康平プラサイズに在籍。2006年より現職。雑誌『世界』(岩波書店)などがある。

コミュニティ・デザイン新論

「包摂か排除か」を越えて



インタビュー

【龍谷大学社会学部講師／シチズンシップ共育企画代表】

【同志社大学大学院総合政策科学研究科教授】

川中大輔

新川達郎

Kawanaka Daisuke

Niikawa Tatsuro

かつての経済成長を支えてきた中産階級の基盤が崩れ、流動化する日本社会。その構造的な変化はまた、世代間・階層間の分断や格差拡大を加速させつつある。課題を乗り越えていくために寛容性を高め、異質な「よそ者」たちを受け入れて混じり合い、新たな価値を生み出せる、そんな真に建設的なコミュニティの形は考え得るのか？同志社大学とCELの教育研究協力協定による「コミュニティ・デザイン論研究」講座で、講師を務められるおふたりとの対話を通じて、その糸口を探り、掘り下げていく――。

池永寛明・弘本由香里(大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所)=聞き手
脇坂敦史=構成 宮村政徳=撮影

21世紀に入りいよいよ加速度的に進む社会構造の変化とともに、さまざまな面で不適合を起こしつつある日本の社会システム。そんななか、コミュニティを通じた問題解決にあらためて注目が集まり、とりわけコミュニティにとっての「よそ者」の関与が何らかの变化をもたらすのではないかと、この期待が少なくない。

「よそ者」の側面が、自他を取り巻く構造的な問題への批判的なまなざしをもつ必要がある。安直で相互依存的な関わりだけでは、さらなる分裂と排除、混乱を招きかねないからだ。あらゆる集団には、常に包摂性と排他性の双方の力が働いているのであり、その点を無視したのでは真に建設的なコミュニティ・デザインはおぼつかないだろう。

異質な者を受け入れ、「よそ者」と混じり合いながら新たな価値観を生み出すことのできるローカルな社会は、はたしてつくり出せるのか？

1950年と80年生まれ、世代もアプローチもまったく違うが、コミュニティというものが本質的にもっている正負の側面を考察し、あるべき「コミュニティ・デザインの形」を問い続けているおふたりに話を伺った。

原点としての「コミュニティ体験」

——新川先生は長年、地方自治や行政学、公共政策論といった分野の研究をされてきましたが、早くからソーシヤル・イノベーションや協働型ガバナンスといったものの役割に注目、その重要性を指摘されてきました。いわば、現在のコミュニティ・デザインを先取りされていたように思うのですが、そうした認識の背景には何があり、どのようなコミュニティ体験がもたらしているのでしょうか？

新川 私の研究それ自体は自治体や政策立案者と共に行うことが多かったのですが、常にそこに住んでいる人々とうまく関わるかを意識してきました(図1)。学生時代に東北で出会った山村の暮らしが、もしかしたら原点かもしれません。田や畑の畦に植えてあるセリや大豆の育て方など小さな知恵のひとつひとつが、地域で培われてきた技術や知識であり文化であるという感覚です。そこで生きる人々同士結びつきを支えるような古い仕組み、たとえば結や講「*1」といったものも残っています。たまたま私が研究で関わりを持った山間の地域では鶏を飼っている農家が多くて、農家のお母さんたちが卵を少しずつ持ち寄って、貯金していたのを覚えています。——村の女性たちが、卵で一種の講をつ

くっていたのですか？

新川 その通りです。鶏を育てる営み自体は戦後から盛んになったのではないかと思えます。おそらく、それ以前は卵以外のものと同じようなことをやっていたのでしょう。そうやって貯めたお金で、彼女たちは農閑期に温泉へ行くのだ、と控えめに語ってくれました。こういう仕組みこそが、豊かな社会の象徴ではないでしょうか。当時の日本はバブル期で、研究の世界でもこういう小さな農村のコミュニティというのは「乗り越えるべきもの」という扱いをされるが多かったのですが、私にはそれが大きな可能性と見えました。——古い伝統が形を変え、時代に合わせ受け継がれていたのですね。

川中 私たちの世代になると、そういう原風景みたいなものはノスタルジーとして聞くことはあっても、経験としては希薄です。個人的には幼少期に育った長屋みたいな場所が比較的ウェットな記憶として残っていますが、その後はニュータウンのよな都会的な場所で育きましたから、私が必死で戦っていたのは、「基本的にこの社会は変わらない」というある種の共通認識でした。何かを変えたいと思って声に出しても、受け止めてもらえない。だから友達はみな、それをとっくに諦めてしまっ

いる状態でしたが、私はいつも「それはおかしい」と反発していました。——その頃、神戸で阪神・淡路大震災を経験されていますよね。

川中 中学2年生のときです。その後、2、3年が経過して落ち着きも出てきたところで、被災児童支援のボランティア活動を始めました。当時の神戸では、震災からの復興という特殊な状況ではあるけれども、市民が声を上げ、市民がリードして社会がつくられていく過程を間近で見

■図1: コミュニティ・デザインのあり方への問い



地域の問題を解決できるコミュニティ形成
市民的な共同性：自由と平等

コミュニティ・デザインの問題を考える際は、地域に暮らすすべての人々を念頭に、問題解決への視点、自由と平等を前提とするシチズンシップに基づいた設計図と手順の提供が不可欠となる。

聞きすることができました。そのとき、「やればできる」「変えることはできる」と強く感じられた。ですが、どこへ行っても10代とか20代はほとんどいなくて、私が最年少でした。

——そうした活動が、若くして「シチズンシップ共育企画」というNPOを設立した原動力になっていったのでしょうか。川中 そうですね。現在は中高生など若者が社会参加できる場づくりに取り組んでいます。学生の頃、被災児童に加えて、不登校児や生活困窮世帯なども関わったことから私は、「周縁に追いやられてしまっている人々」が苦悩を感じている状況へも関心を寄せています。いわば「低きに立つ」コミュニティ・デザインを考えていかなければならないということですよ。

町内会からNPOへ、そして組織の終わり？

——若き日の川中先生が感じられたというコミュニティの硬直性や、NPOがもつ可能性みたいなものを新川先生はどのように見られていますか？ コミュニティの変化に直面しながら、そこに積極的に関わろうとする人々の考え方や態度は、どう変化していったのでしょうか？ 新川 地域コミュニティ的なものの衰退は、私が研究を開始した1970年代よりも前から、ずっと

ている。近年、面白いことをやっている事例は、組織に背を向けて、個人やグループがプロジェクト型でつながっていることが多いように思います。

「よそ者」をうまく使うためには？

新川 自身、いわば「よそ者」としてコミュニティ・デザインに関わることも多いですが、そうした旧来の組織の衰退といった流れのなかで何ができるのか、常に考えさせられています。長期的に腰を据えるのは重要ですが、あまり地域に寄り添いすぎるとままずいかなと思ったり、あるいはまなざしを向けることそれ



言われていました。ある意味では、

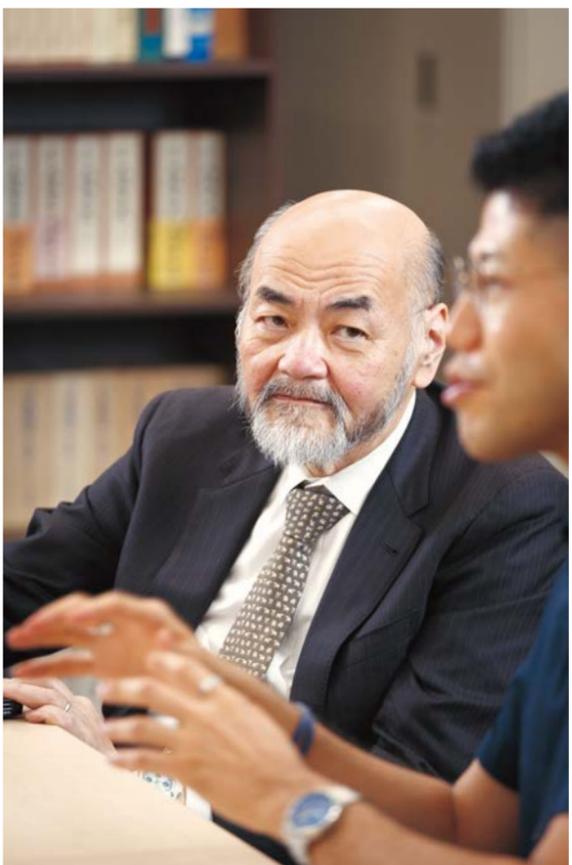
コミュニティがひたすら解体していくという同じ状況のなかで、「理想の地域社会」「あるべきコミュニティの再生」みたいなものが何度かクローズアップされ、繰り返し語られてきたのだと感じます。

現実には、もはや行政の末端組織としての地域コミュニティだけが残っていて残っているような状態にもかかわらず、地域コミュニティの価値はある種の幻想のように生き残り、その再生を目指すような「コミュニティ回帰」的な動きもたびたび強調される。また1990年代半ば以降には阪神・淡路大震災やその復興ボランティア活動があり、従来型の地縁組織とは異なる、たとえばNPOという新しい組織のあり方が注目されるようになったと思います。現在の町内会や自治会の加入率は、かつての80〜90%から60%とだいぶ落ちていますが、全国に約30万団体もあり、その数だけは減っていません。一方でNPOは、この20年間で5万団体以上がつくられてきました。

川中 私には困ったときに助けを求めると、いわゆる「つながり」を必要とするとき、特定の近隣社会のなかでそれがかなえられる環境を形成するという志向性は、以前から希

自体が邪魔になっているかもしれない、と感じる場面も少なくありません。どういう距離感で、どう関わればよいか悩みながら仕事をしています。——コミュニティ自体の捉え方やあり方にも揺れがあるなか、「よそ者」の役割や意義といったものを、あらためてどう考えられますか？

新川 「風の人の、土の人」という言葉もありますが、「よそ者」や「旅人」には当然のことながら固有の役割があると思います。江戸時代にお坊さんや文人が村にやってきて、新しい知恵や知識を伝えていくようなものですよ。けれども、今の社会がそういうように、コミュニティそれぞれがどれほど固定的に見えても、



薄でした。むしろ市民生活にとって必要なネットワークを、多重的に圏域を超えて縦横無尽につくっていくようなイメージで捉えていたと思います。阪神・淡路大震災から20年以上がたち、行政もNPOの役割を真剣に考えることがスタンダードになりました。けれどもどこかで、公共の利益を市場原理にゆだねるようになってしまったのではないかと、この懸念はぬぐえません。本来は、市民の感性や視点を大切にしながら公共をつくりかえていくべきだったはずなのですが、NPOが企業化したり、行政化してしまっているようにも思われます。

——より良い市民社会のためのネット

結果的にそう見えるだけであって、常にダイナミックな変化のなかにあるということをお忘れるべきではありません。同時に、一定の高さをもつ敷居によってゲートキーパーして、外部からの人を選別するための仕組みもあるでしょう。

——逆に、「よそ者」が入ってきやすいような場やイベントを準備することもありますよね。

新川 ハレとケ「*2」でいえばハレの場、伝統的にはお祭りのときなどに「よそ者」との接触が増えます。あるいは何か極端な忌みごとや不幸、大災害があったときにも多くの「よそ者」が入ってくる。日本の地域コミュニティで「よそ者」に注目したのは、高度成長期の過疎振興政策が最初ではないでしょうか。以来、地域の疲弊や危機意識のなかで、それをかき乱してくれる「よそ者」の存在が、一定の価値をもちうる可能性が出てきたと思います。

川中 そういう危機意識があるからこそ、たとえばあちの村で「道の駅」が流行ったから、うちの村でも同じような商品開発をやろう！みたいなことも起きる。しかし、振れ幅が大きすぎて、地域の歴史・文化との連続性もなくなってしまうことが多々ある。コミュニティにとって「変えてはいけないもの」とは一体何だろうか？とよく考えます。

ワークづくりだったはずが、いつのまにか下請けサービス業者のようになっていくことも少なくない、ということでしょうか？

川中 そういう意味でも、コミュニティをどうやってつくっていくか？地域の住民をどう巻き込んでいくか？みたいな視点が、あらためて求められているのかもしれない。さらに強く感じるのは、現在のNPO活動は組織化を強く推し進めたあまり、組織を維持するためのメンテナンスに大きな力を割かなければならない状況に陥ってしまったのではないかと。これはネットワーキングとしての市民活動だったものが、組織の論理を前面に出すことになっ

新川 それを守るために、外の知恵をどんどん借るということも可能になるでしょう。自分自身の暮らしや、これまで生きてきた条件までを否定してしまうと、ある意味では根無しになってしまう。「内と外」という構図も消えてしまう。「よそ者」という刺激は大切かもしれませんが、本当に地域をつくらせている担い手が、自分の暮らしをそこでつくっていくことが前提になれば意味があります。

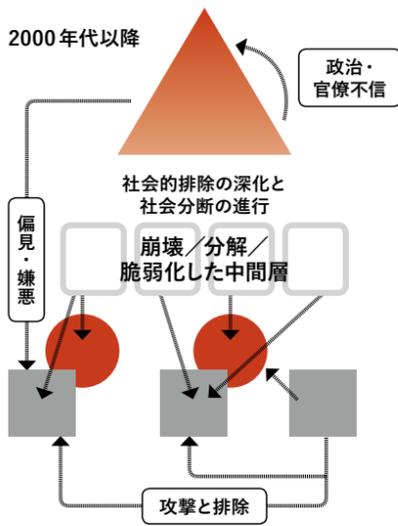
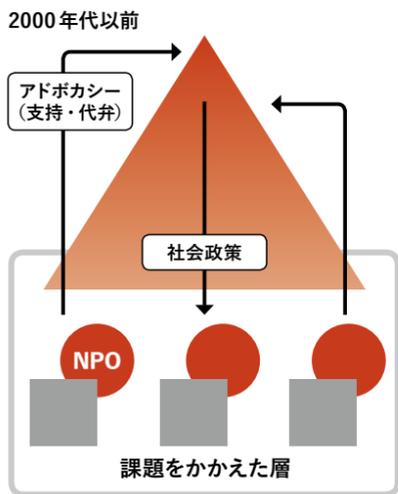
川中 コミュニティに「よそ者」として関わる際には、地域のことをよく知っている「プロデューサー」が大切だと考えています。よいプレイヤーが中心になることもあるでしょうが、プレイヤーというのは地域のなかで浮き上がってしまいがちです。むしろ、そういう人のこともよく知っていて、「よそ者」とうまく結びつけてくれるような力をもった人が、大きな役割を担うことが多い。

「内なるよそ者たち」に目を向け、耳を傾ける

——「自身があるコミュニティから「よそ者」として扱われることによって、得られた気づきはありますか？

川中 当たり前ですが、まず感じるはその場所に特有の「居心地の悪さ」です。でも、私はそれをとても大切だと思っています。なぜかとい

■図2：コミュニティ・デザインは攻撃と排除を越えられるか？



2000年代以降、急激に分断の進む社会——その周縁にあって課題を抱えた層は、いよいよ排除や攻撃の対象にされつつある。NPOをはじめとする新たなコミュニティ・デザイン構築に対する期待は大きい。出典／川中大輔「市民による社会貢献」と社会的企業」(2018年)

うと、この「居心地の悪さ」を地域のほかの誰かも感じているに違いはないと考えるからです。それは若者かもしれないし、新しい住民や在日外国人か、女性かもしれない。また、その居心地の悪さを感じている人だけでなく、私の目から見て「あ、この人面白い」と思うような人を見つける役割も重要だと思っています。固定化された関係のなかで、「あいつは、こういうやつだよね」「みたいな認識にとどまっているものを、「面白い」と言う。

——どちらも、「内なる他者」というか、同質なものだと思っていたコミュニティのなかに異質なものを見つけて、当たり前と思っていることを変える役割ですね。川中 社会やコミュニティのなかで「周縁化」されている人たちというのは、システムの問題点にいちばん気づきやすい存在でもあると考えています。たとえば、非正規雇用者や

在日外国人たちにとっての生きづらさが、この社会の課題をよりはっきりと示してくれている。そこで示された課題と向き合うコミュニティ・デザインの実践が大切ですね(図2)。新川 そういう「差別」の構造を、私たち自身が再生産しつづけている。そして、自分も「周縁化」されたひとりかもしれない。そこから考えたとき、コミュニティそのものをつくり変える大きなチャンスがあるのだと思います。言い方としてはあまり好きではないのですが、社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)というのはたぶん、そういう考え方がいいでしょう。

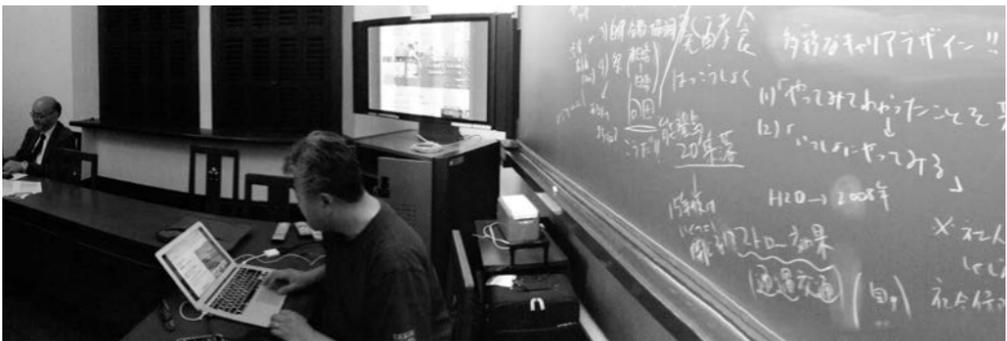
川中 コミュニティ・デザインという一般的なすぐ地域の人たちを集めて、ワークショップをやりますよ、みたいな感じになるんですけど(笑)、「はい、何かしゃべってください」と言われても声を出せない人

は多くいます。それに、そもそもこの場に来れない人は誰なのか？ということ踏まえたうえで話し合うことができるかどうか。——いわば不在者がいけばんの他者ということになるわけですね。

川中 その通りです。その存在を想像するのはとても難しいことですが、今は本だけでなく、インターネットを通じて多くの当事者が一次情報を出すようになってきているので、少なくともそういうものを探して向き合っていく感性が大切でしょう。同時に、話すことに価値がおかれすぎている現代のコミュニケーション観も変えていく必要があると私は考えています。会議で自分の考えをうまく話すだけでは、話し手の中で何も変化しない。むしろ、ほかの人の意見を聞いて「あ、その考えがあるのか」となったとき、初めて人は変わることができると、話し合いの意味

コミュニティや居場所が大切だとか、それを言われるのが腹立たしいのだそうです(笑)。本人は課題があってもなかなか声に出せないから、おせっかいに見えても関わっていくことが必要なこともあるのですが、それに対する反発も当然あるわけですから、やはり「ひとりぼっち」の価値も含め、本人の意思表示も最大限に尊重されることが求められているのだと思います。こうした「間合い」にも敏感でありたいものです。

新川 現実に、私たちは何かコミュニティ(共同社会的)な共通性がなければ生きていけないし、いつもどこかでコミュニティと関わらざるを得ません。だとすれば、あらゆる種類のコミュニティが生まれ、壊れ、毎日つくりなおされていると考える方が、実態に合っているでしょう。一方でコミュニティは、支配者にとって都合のよい支配の道具にもなりえます。ひとりひとりの個人がコミュニティを選び、それをコントロールすることができるとか。個人の顔が見えないコミュニティの危うさとともに、考えていかなければならないのではないのでしょうか。そういった個人の選択までも含めた大きな意味でのコミュニティ・デザインが求められているのではないかと、今は思っています。



同志社大学大学院総合政策科学研究科とCELの教育研究協力協定による連携講座「コミュニティ・デザイン論研究」では、毎回、激変するコミュニティの最前線と切り結ぶ実践者や研究者を講師に迎え、問題解決への知を共有する試みが続けられている。撮影／山口洋典

川中 一見してまったく違う研究分野、実践分野でありながら、実はつながっているところがあり、「あそこでも、ここでも同じようなことが議論されているんだ」ということを知り、とても勇気づけられます。また、コミュニティ・デザインというスキルやテクニックの話になりがちですが、何を実現したいのかについて議論する場が意外に少なかったりします。こういう場で実践者と研究者が出会うことは、コミュニティ・デザインのより本質的な部分に目を向けるよい機会だと思います。新川 たとえば、よく「次の世代のことを考えて」とか「持続可能なやり方」といった言い方がなされます。けれども、疑いや批判もなく、キャッチフレーズだけがひとり歩きしていることも珍しくありません。これからのコミュニティ・デザインを考えたとき、こういう反省とか内省といった営みが欠かせないと考えています。

川中 人間の弱い部分や傷ついている部分を互いに見せ合いながら、「じゃあ、どうしようか」と支え合えるような社会を目指すべきと考えています。ところで、私が教えている学生のひとりが今、卒論を書いていて、そのテーマが「ひとりぼっち」の価値みたいなものかどうかです。つながりが大切だとか、コ

も出てくる。話すことではなく、聴くことを重視したコミュニケーションをどうつくっていくか。それが大切だと思っています。

**流行に終わらない
コミュニティ・デザインを
目指して**

——同志社大学大学院総合政策科学研究科とCEL(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)の教育研究協力協定により2010年に開講し、おふたりが講師を務めておられる「コミュニティ・デザイン論研究」講座についてお話を聞かせてください。ここではコミュニティの負の側面にも目を向け、異分野を横断し、実践者と研究者が混じり合いながら企画・運営がなされています。この講座を組み立ててきた、新川先生ならではの理念が色濃くにじみ出た画期的な試みだと思いますが、いかがでしょうか。

新川 単に講義をする、講義を聴くということだけでなく、私たち自身も学生と共に学びとっていくことのできる機会をつくりたいと思います。始めました。理想としては、学生が先生となり、先生が学生にもなれるような場。双方のコミュニケーションを大切にしながら、研究者だけでなく実践者の方にも多く入っていたらいい。実務に即した議論を活発に実践者の方たちの素朴なやり取りのな

——デザインされたものを批判的に検討し、新しく創造するためのコミュニティ・デザインを起動するヒントを、おふたりからたくさんいただきました。本日はどうもありがとうございました。

注 *1 共同体内における結びつきや会合で、相互扶助や共同作業をその目的とした。
*2 民俗学者の柳田国男によって見出された概念で、ケはふだん通りの日常、ハレは祭礼や行事などの特別な日を指す。



新川達郎
にかわ・たつろう

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授。1950年生まれ。愛媛県松山市で育つ。専門は地方自治論・行政学・公共政策論。東北大学大学院情報科学研究科助教授などを経て現職。NPO法人日本サステイナブル・コミュニティ・センター代表理事。編・著書に『地域力を高めるこれからの協働』(第一法規)、『コミュニティ再生と地方自治体再編』(ぎょうせい)などがある。



川中大輔
かわなか・だいすけ

龍谷大学社会学部講師/シチズンシップ共育企画代表/日本シチズンシップ教育フォーラム運営委員・事務局長。1980年、神戸市生まれ。1998年から青少年支援、環境・まちづくり・市民活動支援の活動に取り組み、2003年に「市民としての意識と行動力」を育む学びの場をつくる「シチズンシップ共育企画」を設立。全国各地でワークショップを開催している。共著に『シチズンシップ教育で創る学校の未来』(東洋館出版社)などがある。

かに、私自身が今まで気づけなかった真実を発見することも多く、すぐく勉強になるなど思いながら授業をつくっています。

——建築や災害ボランティア、多文化共生など、扱われるテーマも多彩ですね。

「関係人口」とは何か？ —その背景・意義・可能性

小田切徳美
Odagiri Tokumi

ハードルの高い「移住」でもなく、一過性の「観光客」でもない
いわば第3の人口ともいえる「関係人口」という考え方に今注目が集まっている。
離れていても、ある地域に愛着を感じ、応援し、役立つことができる
多様な人々を有する「関係人口」は、今後、都市と農村が共生する
新たな社会へ導くものとなり得るのか？ 背景やその可能性を考察し
新たなよき者像としての未来への可能性をさぐる。

おだぎり・とくみ
1959年、神奈川県生まれ。明治大学農学部教授。東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学。東京大学大学院助教授などを経て、2006年より現職。日本学術会議会員、日本地域政策学会会長、ふるさとづくり有識者会議座長（内閣官房）、国土審議会委員（国土交通省）、過疎問題懇談会委員（総務省）、今後の農林漁業・農山漁村のあり方に関する研究会座長（全国町村会）などを兼任。著書・編著に『農山村は消滅しない』岩波書店、『世界の田園回帰』（共編著、農文協）、『内発的農村発展論』（共編著、農林統計出版）など多数。

はじめに

— 活性化する「関係人口」論議

本稿がテーマとする「関係人口」は、「新語」ではあるが急速に世の中に広がっている。たとえば、政府会議における首相挨拶や新聞紙上にも登場する用語である。

前者に関しては、地方創生の新しい方針を決めた会議において、安倍総理の次のような発言が記録されている。

「安倍内閣総理大臣——そうした観点から、例えば、週末の地方での兼業・副業など、関係人口の創出・拡大によって、将来的な地方移住につながることや、企業版ふるさと納税の活用促進による、地方の魅力を一層高めていく取組などの政策を通じて、地方への人・資金の流れを重層的な形でもっと太いものにしていきたいと考えています——」

（まち・ひと・しごと創生会議、2019年6月11日）
また、後者の例として、「日本経済新聞」の最近の社説が次のように触れている。
「政府は地方創生の第2期として2020年度から5年間の基本方針を決めた。都市に住みながら地方にかかわる「関係人口」を増やし、交流によって活性化することを柱にする。東京一極集中の是正という課題を直視するのを避けた形で、もっと正面から東京一極集中に向き合う必要がある」（2019年6月24日）

これらの例からわかるのは、新語であるにもかかわらず、賛否を分かたず対象となっていることである。今後、ますます議論呼びつ、普及していく言葉であることが予想され、その意味で「現代的キーワード」であろう。本稿では、この言葉の意味、背景や意義、そして政策的課題について、まとめてみたい。

関係人口とその背景

「関係人口」という言葉を、定義しつつ、使い始めたのは『月刊ソトコト』編集長の指出（さしでかき）正氏である。氏は、空き家のリノベーションを楽しみながら進める新潟県十日町市の若者建築集団などのユニークな活動をする若者を紹介し、「関係人口」とは、言葉のとおり『地域に関わってくられる人口』のこと。自分のお気に入りの地域に週末ごとに通ってくれたり、頻繁に通わなくても何らかの形でその地域を応援してくれるような人たち」（『ぼくらは地方で幸せを見つけた』ポプラ社、2016年）とした。そして、「いくつかの地域ではそうした関係人口が目に見えて増えている」とも論じている（同書）。編集長自らのそのような認識から『ソトコト』誌は、18年2月号と19年3月号の2回、「関係人口特集」を企画しており、

そこからもこの概念は広がっている。

その現実を次の表（図1）で確認してみよう。いずれも内閣府の世論調査結果により、農山漁村に対する国民意識とその変化を見たものである。表の①では、農山漁村地域への定住願望を尋ねているが、男女とも、「定住願望がある」という回答が増大しており、特に20歳代男性では、14年には47%以上にもなっていることが注目される。

また、②は農村地域の維持活動への意識を見たものであり（設問は「農業の停滞や過疎化・高齢化な

どにより活力が低下した農村地域に対して、あなたはどのように関わりたいですか」というもの）、男女共通して「協力したいとは思わない」が7ポイントも増加して、「農村離れ」が見られる。しかし、20歳代の男子に限定すれば、全く逆に、「積極的に維持活動に協力したい」が約10ポイントも増加しており、彼らの農村へのシンパシーの増大を見ることができ、先の定住願望の大きさと重なるものであろう。

への「関わり」に対する新しい意識や多様化が生じている。
それでは、なぜこのような変化が生まれているのであろうか。次のように考えたい。
第1に、大状況として、人々のライフスタイルの多様化がある。たとえば、政府の重要文書にも、次のような記述がある。「社会の成熟化に伴い国民の価値観が多様化している。国際化の中で競争に勝ち抜き経済的豊かさを目指す『経済志向』、自然や地域に根付いた生活により金銭に換算できない豊かさを求める『生活志向』等働き方や生き方について様々な価値観に基づくライフスタイルを実現することも可能となっている」（『第二次国土形成計画』、2015年）。この点は、すでに言い尽くされたことであろう。しかし、特に、若者の多様な生き方、暮らし方の一部に、地域とのさまざまな「関係」を求める価値観が出てきている点は新しい傾向といえる。

第2に、この「関係」に関わり、その手段としての情報通信技術の進化があげられる。地元から多数の地域情報が、日々、SNSを通じて発信されている。地震や水害の被災地からの支援要請の情報はもちろん、「空き家改修ボランティアの募集」などは地域情報の定番となっている。また、クラウドファンディングは、地域が利用する当たり前のツールであり、それはもちろんICT時代の産物であろう。

そして、第3に、これらふたつの要素を外的条件として、「関わり価値」の発生が指摘できる。一般的なライフスタイルの多様化のなかで、地域やそこに住む人々と関係を持つことに意義を見いだす人々、特に若者が生まれている。先の指出氏は、ある講演会で「若者は関係を創るためにお金

■図1：国民の農山漁村に対する意識の変化（内閣府世論調査結果）

①農山漁村地域の定住願望の有無（単位：％）

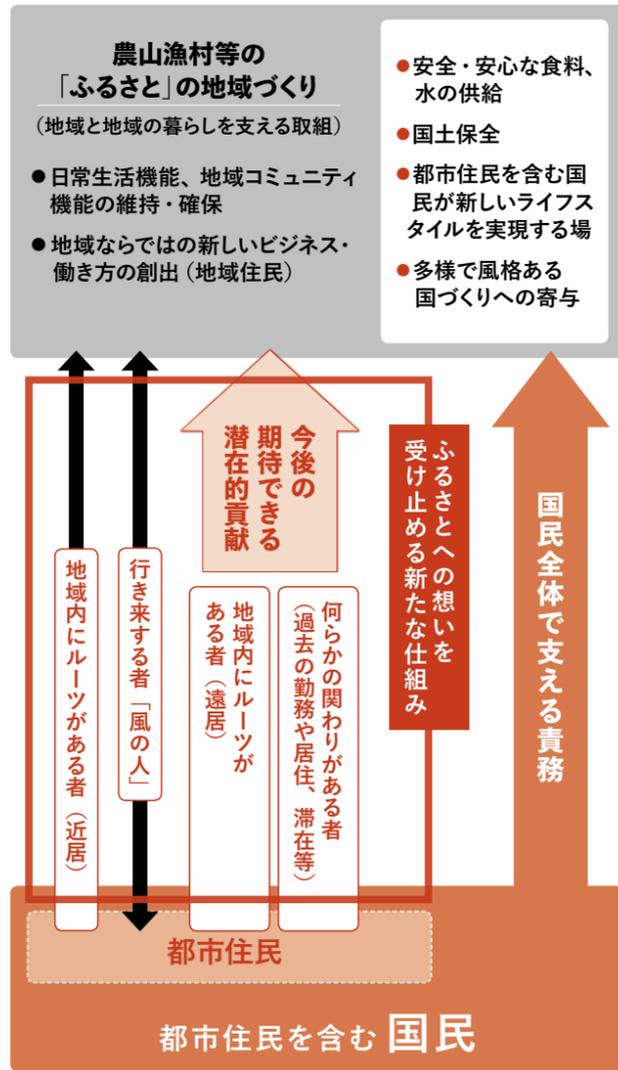
	定住願望がある （「どちらかというところ」を含む）			定住願望はない （「どちらかというところない」を含む）			どちらともいえない			合計
	2005年	2014年	増減	2005年	2014年	増減	2005年	2014年	増減	
女性	16.3	26.7	10.4	80.9	69.9	-11	2.5	2.5	0.0	100.0
男性	25.7	36.8	11.1	70.4	60.2	-10.2	3.5	2.2	-1.3	100.0
うち20歳代	34.6	47.4	12.8	63.5	47.4	-16.1	1.9	2.6	0.7	100.0

②農作業や環境保全活動・お祭りなどの伝統文化の維持活動について（単位：％）

	積極的に維持活動に 協力したい			機会があれば 維持活動に協力したい			協力したいとは思わない			合計
	2008年	2014年	増減	2008年	2014年	増減	2008年	2014年	増減	
女性	17.8	15.7	-2.1	63.9	58.4	-5.5	9.9	16.9	7.0	100.0
男性	19.0	18.3	-0.7	60.8	54.5	-6.3	12.9	20.1	7.2	100.0
うち20歳代	13.4	22.9	9.5	64.7	60.0	-4.7	19.3	17.1	-2.2	100.0

注1/資料=内閣府世論調査
（2005年「食料・農業・農村の役割に関する世論調査」、
2008年「食料・農業・農村の役割に関する世論調査」、
2014年「農山漁村に関する世論調査」）
2/いずれの問いも「わからない」などの表示は省略した
3/①は都市地域居住者への質問

■図3：「ふるさと」の地域づくりの役割と担い手の多様化



出典／総務省「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書」より

鳥取県日野町の「ふるさと住民票カード」



「ふるさと住民票」に登録するとカードが発行され、日野町の場合には、公共施設の住民料金での利用や、伝統行事やイベントへの案内、町の計画や政策へのパブリックコメントへの参加などのサービスを受けることができる。

このように関係人口は、地域の多様な「応援団」として、また今後の移住者の拡大のためにも、さらなる増大が期待される。それを促進するためにはどのような政策が求められているのだろうか。

関係人口拡充のための政策

し、ときには右上の「移住」から左方向へ移動することを意味している。最近では、しばしば「風の人」などと呼ばれており、そのような名前が付くほどの存在となり始めている。

こうした新しい傾向を含めて、地方の地域への人々の行動の全体像を把握するために、この関係人口概念は有効性を持っており、それは、生まれやすくして生まれたものであろう。

ふたつの省庁で検討が行われているため、それを紹介してみよう。

第1に、総務省に設置された「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会」(2016～18年)での検討である。その報告書では、「地域や地域の人々と多様に関わる者である『関係人口』に着目し、『ふるさと』に想いを寄せる地域外の人材との継続的かつ複層的なネットワークを形成することにより、このような人材と『ふるさと』との関わりを深め、地域内外の連携によって自立的で継続的な地域づくりを実現することが重要」であると関係人口を論じている(中間報告、2017年4月)。この文書は、おそらく、政府関係ではじめて関係人口を位置づけたものであろう(図3・検討会報告書より期待される役割について抜粋する)。

具体的対応の方向性については、①「関わり」の「段階」を意識した段階的な移住・交流の支援、②地域に思いを寄せる関係人口の受け皿となる自治体レベルの新しい仕組み、③中間支援組織などによる①や②などへのサポートが論じられた。

これを受けて、総務省では、2018年度から関係人口モデル事業を創設して、2年間にわたりそれぞれ30自治体による関係人口に関わる事業への支援を行っている。そこで蓄積されたノウハウや課題が今後の政策形成に活かされることとなる。

そのなかで、ひとつの焦点となっているのが市町村による「ふるさと住民票」の試みである。先の報告書では、「『関係人口』を持つ、『ふるさと』の地域づくりに対して貢献したいという想いを受

を使うことが当たり前前の時代になっている」と端的に表現している。同義反復ではあるが、地域と関わりを持つこと自体の価値を、あえて「関わり価値」と呼べば、その高価値化を確認できる時代となっているのである。

このような「関係人口」の概念には、大きな意義がある。その説明のためにも、概念図(図2・筆者は「関係人口チャート」と呼ぶ)を作成し、「関係人口」の見える化を試みたい。縦軸に地域への「関心」の程度を取り、横軸に「関与」を取っている。つまり、関係人口の「関心」を、「関心」と「関与」に分解して、その組み合わせを示したものである。関係人口の存在領域は、図のグレイの枠組みの部分となる。関心も関与もない「無関係人口」はもちろん、強い関心を持ちずでに移住した者はそれには含まれない。また、観光のため、一過的に地域を訪問した者は「無関係人口」に含まれている。関係人口がしばしば、「観光人口」を超え、定住人口未満」と表現されているが、まさにそのような状況を図示している。

そのうえで、関係人口認識には、地方創生のなかで注目されている地方移住(田園回帰)が生じるプロセスを明らかにするという意義がある。移住者の実態をつぶさに見れば、人々の地域への関わりは段階的である。たとえば、観光としての訪問を契機として、①地域の特産品の継続的な購入↓②地域への寄付↓③頻繁な訪問↓④地域でのボランティア活動↓⑤二地域居住↓⑥移住というプロセスを経る人がいる。先に掲げた図2はそれらを示しており、階段状のプロセス(筆者は「関わり」

階段」と呼びたい)を経て、移住に至っている。このことから、政策的には、次のことも導かれる。第1に、移住促進政策とは、この階段を上りサポートすることであることが視覚的にわかる。この階段を踏み外さぬよう、きめ細かい対応が必要になる。たとえば、特産品を購入した者に対して、地域のためのクラウドファンディングや「ふるさと納税」を丁寧に案内するのは、有効な手段となる。

そして、第2に、田園回帰はこの関係人口の厚みと拡がりのなかで生まれた現象であることがわかる。つまり、若者をはじめとする多彩な農村への関わりが見られ、そのひとつの形として移住者が生まれている。逆に言えば、「関わり」の「段階」を上る人々の裾野の拡がりがなければ、田園回帰も今ほど活発化していかないだろう。

このように考えると、冒頭で見た日本経済新聞の社説による、関係人口を持ち出すことで、「東京一極集中の是正」という課題を直視するのを避けた形」だとする新しい地方創生への批判に当たっては、むしろ、関係人口は地方移住をさらなるトレンドとするためにも、欠かせない存在だと捉え直すべきであろう。

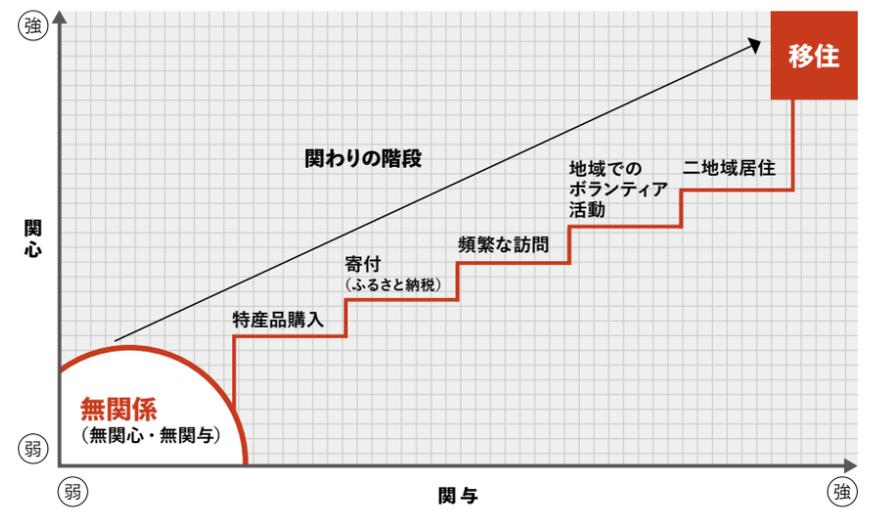
しかし、実は、関係人口は、このような地方移住との関係を超えた革新的な議論でもある。それは、ふたつの実態が教えてくれている。

ひとつは、指出氏が活写した関係人口の諸事例は、「関わり」の「段階」を上ることに必ずしもこだわりを持たない人々がほとんどであるということだ。同じステップに踏みとどまり、移住などは考えない人々も立派な関係人口である。ローカルジャーナリストの田中輝美氏は、移住への過度の誘導は、逆に「定住しなくては地域にかかわる資

格がない」というメッセージとなると、鋭く批判する(田中輝美「関係人口をつくる」木楽舎、2017年)。

ふたつは、「関わり」の「段階」から、意図的に外れる関係人口も生まれているということがある。それは、特定の農村に強い思いを持ちながらも、あえてその地域に定住しないライフスタイルを選ぶ若者群である。彼らのなかには、地域外に住み、その地域のさまざまな取り組みをコーディネートする者もいる。先の図2では、図中の上部に位置

■図2：関係人口の図式化と「関わり」の段階





「つながりサポート機能」の強化を図るために、民間企業などの活用も検討されている。事例として、WILLER(株)が運営するレストランパスや、(一社)ノオトが展開する古民家などの空き家再生と事業者マッチングの取り組みとの連携などがあげられている。

け止めるため、地方公共団体は、自らの団体の『関係人口』を認識し、それらの者に対して、地域と継続的なつながりを持つ機会を提供していくことが重要である」(最終報告、2018年1月)とやや抽象的であるが、それに触れている。また、この報告書以前より、シンクタンクの「構想日本」が、「ふるさと住民票」の政策提言を行い(2015年)、すでに鳥取県日野町をはじめ8自治体の取り組みが新たに始まっている。

このように現在進んでいる実践的実践を通じて、「ふるさと住民」の具体的関わり方を深化させるノウハウなどが明らかになることが期待される。そこに可能性がある場合、将来的には「ふるさと住民」の仕組みを国レベルの制度とするのか否か、さらに進んで、「ふるさと住民」の活動への国レベルの何らかの財政支援が議論となろう。

また、第2に、国土交通省の国土審議会に設置された「住み続けられる国土専門委員会」では、国土への人々の新しい関わり方として、やはり関

の階段」でも、「寄付(ふるさと納税)」というひとつのステップを示したのはそのためである。

このような視点から見れば、昨今議論されている、ふるさと納税の返礼品をめぐる問題は、それが寄付者(関係人口)と地域との関係の持続化またはステップアップ化に資するか否かという点での評価が重要となる。寄付者に、もっぱら格安での商品購入という意識が生じているとすれば、そこには「関わり」の「段階」は成立していない。実際、ふるさと納税の経験者のなかには、産品(牛肉、カニなど)は認識しているが、その寄付先の自治体名は覚えていない者もいる。このケースでは、寄付者と寄付先地域には、なんら関係が生まれていない。

そうではなく、返礼品を媒介として、たとえば、寄付者が地域の生産現場を訪れることに誘導する



東京で開催された「上土幌まるごと見本市2018」では、特産品の無料試食や移住・観光などの相談コーナー開設のほか、将来的に運行を目指す自動運転バスの展示などもされ多くの人々にぎわった。



係人口に注目している。ここでは、「従来の各地域の定住人口に加え、新たな動きとして注目されている関係人口を増加させるためには、移住、二地域居住・就労、地域と関わりを持つことを支援する機能を強化する必要がある」(同専門委員会報告書、2018年)として、それを「つながりサポート機能」と名付け、整理した。「移住」と「関わり」の両者に、つながりサポートの強化という共通する課題があることを認識し、そのような「つながりサポート機能」を持つ組織を市町村段階——全国段階で整備する必要性を提言している。具体的な政策化は今後の課題であるが、公共政策の領域のなかに「つながりサポート」の促進という新しいテーマを打ち立てた意義は小さくない。

ふるさと納税と関係人口

話題となっているふるさと納税も、関係人口とは無関係ではない。先の図2における、「関わり

など、より深い関係づくりを段階的に促進するような対応が自治体には求められる。こうしたふるさと納税の「関係人口論的運用」ができるか否かが、今後の課題であろう。

実際に、ふるさと納税を、関係人口とそのステップアップを強く意識して、運用している自治体もある。たとえば、北海道上土幌町である。同町へのふるさと納税の寄付総額は2018年度で20・9億円にもなり、北海道でもトップクラスである(2018年度は道内第6位)。

この寄付額の大きさは、返礼品(ジェラートアイスや牛肉など)の魅力や、いち早くふるさと納税のための寄付金のクレジットカード対応を可能としたことなどが背景にある。しかし、それに加えて、資金を育児支援に集中投資することを表明し、「ふるさと納税・子育て少子化対策基金条例」(2014年)により、新たな基金を創設したことも寄付者の共感を呼んでいる。この基金により、町の認定こども園の保育料を10年間無償化し、外国人教員の配置も行っている。そのため、この園の園児数は持続的に増加している。

また、2018年度には、新たにクラウドファンディング型のふるさと納税にも取り組んでおり、そのメニューとして「起業家支援」(そば屋の営業経費支援)、「移住交流プロジェクト支援」(移住者住宅の改装)を掲げ、特に前者には238件、309・5万円の寄付が集まり、18年12月には移住者が開業を実現している。

さらに、ふるさと納税寄付者などを対象に、東京での「まるごと見本市」の開催も注目される。これは、2018年で4回目となり、約10000人の来訪者があり、特に移住相談コーナーの充実を力を入れている。また、寄付者などから移住体



右/上土幌町は韃靼(ダツタン) そばの産地にもかかわらず、数年前にそば屋が一軒もなくなってしまったことを受け、起業家支援を開始。空き店舗を改修し、東京出身の移住者により営業が実現した。上/北海道上土幌町では、認定こども園の保育料10年間無償化のほか、幼児期からの国際理解と異文化交流を進めるため、ネイティブの外国語指導助手及び国際交流推進員の配置も行っている。

験モニターを募集し、町内の滞在期間中は、町の生涯学習活動である「生涯活躍かみしほろ塾」のスタッフとして参加できる仕組みは、地域住民との交流の場の形成という効果がある。これらのベースになるのは、1・5万人にも及ぶ寄付者のメーリングリストであり、寄付後のつながりがこうしたかたちで確保されている。そして、このような多彩な関係人口づくりの延長線上で移住者が増え続けている。上土幌町の人口は、14年末に4884人でボトムとなり、その後は増加して、19年7月には4979人まで回復している。

おわりに

——都市農村共生社会へ——

本稿で見たように、「関係人口」という概念の登場は、都市部に住む者が地方部に関心を持ち、何らかの関与をする実態があることを明らかにした。これを、国土という大きな枠組みで考えれば、国民レベルでの都市と地方(農村)との接近を意味している。さまざまな局面で見られる社会の閉塞状況は、ともすれば人々の分断を生みだし、特に地理的な対立、つまり都市と農村の対立となりがちである。その点で、関係人口の存在は、そのような対立を超えて、両者が共生する社会を草の根的に創造する、ひとつの条件と考えられる。「都市なくして農村なし、農村なくして都市なし」という理念を実現する都市農村共生社会への入り口を関係人口に見ることができるといえる。

私達が関係人口を意識するもうひとつの理由がここにある。このような大きな視点からも、今後関係人口に注目していきたい。

新たなコミュニケーションを創造する 「聖地巡礼」の面白さ

岡本健
Okamoto Takeshi

インターネットとSNSの普及で、個人による情報発信があたりまえの時代が到来し、地域の観光資源は従来の絶景や神社仏閣、ハコモノとは限らなくなった。1本のアニメ作品やゲーム、1冊の小説やマンガを契機に、日本のみならず世界の人々が、舞台となる「聖地」——多くは観光地ではない地域の、これまで注目されてこなかったスポットへと訪れている。ポップカルチャーならではの強い磁力が引き寄せる「よそ者」の存在とは？そこに生まれる地域との新たなつながりを、コンテンツツーリズムの視点から考える。

おかもと・たけし
1983年、奈良県生まれ。近畿大学総合社会学部総合社会学科准教授。2007年、北海道大学文学部卒業（認知心理学専攻）。2012年、同大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程修了。京都文教大学、奈良県立大学の教員を経て2019年から現職。専門は、観光学・観光社会学。編・著書に『巡礼ビジネス』（角川新書）、『コンテンツツーリズム研究』（福村出版）、『ゾンビ学』（人文書院）などがある。

注目を集めるコンテンツ作品の「聖地巡礼」

2019年7月18日におきた京都アニメーション放火事件に関する報道において、たびたび「聖地巡礼」という言葉が登場した。ここでいう聖地巡礼は、原義である宗教上の聖地を巡るものではなく、ファンがアニメやマンガ、映画、ゲーム等のコンテンツ作品の舞台になった場所を訪れる行為を指している。

筆者は、この聖地巡礼について、この10年以上にわたって調査研究を続けてきたこともあり、事件後、京都アニメーションと聖地巡礼の関係性を中心に、数多くの取材依頼があった。これまで、『涼宮ハルヒの憂鬱』『らき☆すた』『けいおん!』『氷菓』『Free!』『響け！ユーフォニアム』などの京都アニメーション作品は、その舞台をファ

ンが巡る聖地巡礼を数多く引き起こしてきている。筆者自身も博士論文や書籍の中で事例として、京アニメーションの聖地を分析してきた。

アニメファンにとつては、京都アニメーションと言えば、「京アニクオリティ」と呼ばれるほどの高い質のアニメを作る制作会社として有名だ。ただ、一般の人々には事件の報道で「京都アニメーション」と聞いただけでは、その価値の高さが理解しづらいと、新聞記者やテレビのディレクターにも伝わりやすいと考えられたのが、「聖地巡礼」だったというわけである。

コンテンツの聖地巡礼が一般の人々に広く認知されたのは、2016年に公開された『君の名は。』（新海誠監督）によるところが大きいと思われる。本作は作品そのものが大ヒットするとともに



『けいおん!』の聖地として一躍その存在を知られることになった、滋賀県犬上郡豊郷町にある豊郷小学校旧校舎群（左下）と、作品内にたびたび登場する校舎内の階段（右下）、ファンが持ち寄ったグッズの数々（上）。©かきふらい・芳文社／桜高軽音部

様々な手掛かりを頼りに、どこが舞台なのかを探し出すアニメファンがいる。

この時、一つ注意しておきたいのは、アニメの舞台になっていない場所は、そもそもあまり知られていない場所が多いということである。多くの人がよく知る富士山や東京スカイツリーなどのランドマークや、清水寺や伊勢神宮などの観光地というよりも、どちらかというと日常的な風景や住宅地、学校、都市景観などが用いられやすい。たとえば、『涼宮ハルヒの憂鬱』の聖地の一つは駅の駐輪場である。こうした、一見ただけでは多くの人は特定できない場所を「発見」するのだ。当然、アニメ制作者はロケハンを行って背景を描いているわけなので、「再発見」とするのが正しいのだが、公式サイドから情報を得ているわけではなく、アニメファンは自分たちの力で見つけ出すとする。

この開拓的アニメ聖地巡礼者は、単に舞台を探し出して満足するだけでは終わらない。その情報をインターネット上で発信するのである。筆者はこれまで多数のアニメファンにインタビュー調査を実施してきたが、なかには1980年代のパソコン通信の時代から、作品の舞台についての情報交換をしていたという人もいた。筆者の調査によると、『究極超人あゝる』（1991年）、『美少女戦士セーラームーン』（1992年）、『天地無用！ 魎皇鬼』（1992年）などが、聖地巡礼が行われた初期の作品だと考えられる。そして、ネット上に発信された聖地の情報を見た他のファンが聖地巡礼を行う。筆者はこのファンを「追従型アニメ聖地巡礼者」と呼んでいるが、このように、旅行者側が発信した情報に駆動されて、観光プロセスが回り始めるのが特徴なのだ。

（1974年）を見てスイスに観光旅行にでかける人はいたわけで、そうなること、アニメの聖地巡礼も40年以上の歴史があることになる。確かに「アニメの舞台になった場所を訪れる」という意味に捉えるところとした事例も含まれてくるが、現在のアニメ聖地巡礼の大きな特徴の一つは「ネットを用いた旅行者の情報発信」であり、そう考えると、今に直接つながる聖地巡礼の始まりは1990年代前半に求められる。

聖地巡礼の特徴として、旅行者側が観光情報の

発信を含めた観光プロセスを形作っている点が挙げられる。アニメの背景として描かれた場所を、ファンが探し出して「ここだ!」と同定するのだ。筆者はこの舞台を探し出すファンを「開拓的アニメ聖地巡礼者」と呼んでいる。多くの作品では、アニメの背景にどこを用いたのかは明示されない。物語内では、現実の場所の名前とは異なる名前が付けられていることも多く、元々その場所を知っている場合は別として、一見してどこか風景をモデルにしているかはわからない。この状況から、



地元とファンが一緒になって担がれている、久喜市鷲宮の土師祭恒例「らき☆すた神輿」。©美水かがみ/らっきー☆ばらだいす

観光振興を包摂する用語として理解し、研究を行ってきた。その結果、明らかになったことは、コンテンツツーリズムの現場では、経済効果や入込客数だけに還元できないような地域側のメリットがあるということだった。コンテンツが無ければ出会うことのなかった人々がむすびづくことによって、新たなアイデアやネットワークが創出されるのである。

具体的にプロセスを見てみよう。アニメの聖地に赴くと、聖地巡礼者による様々な「表現物」を見ることが出来る。聖地に設置された聖地巡礼ノートには、コメントやイラストが書き込まれている。記述を見ると、遠方から何度も訪れている人や、海外からの旅客もいることがわかる。聖地

そうしてアニメファンが地域を訪れることになるが、地域住民はアニメ作品に自地域が描かれていることを知らない場合すらある。これは作品や地域によって異なるし、今は、聖地巡礼や後述のコンテンツツーリズムがよく知られるようになったが、特にアニメ聖地巡礼の初期の事例では、旅客の訪問は地域住民にとって「不意打ち」的になることが多かった。それは、大河ドラマや朝の連続テレビ小説のロケ地観光とは異なり、コンテンツ製作サイドや行政が、ロケ地になったことを大々的に宣伝しているわけではなかったからである。なかには、そのことが原因でトラブルになっ



『らき☆すた』の聖地である鷲宮神社に奉納された「表現物」としての“痛絵馬”（上）。埼玉県久喜市にある鷲宮神社（中）と町内の寿司店にファンが持ち寄ったグッズの数々（下）。©美水かがみ/らっきー☆ばらだいす

が神社などの場合は、絵馬にアニメの絵が描かれた「痛絵馬」がかかっている。こちらにも、自分が大切にしているアニメの舞台に来たことの喜びがあふれている。アニメの舞台にキャラクターのコスプレをしてくる人や、車にアニメのイラストをあしらった「痛車」で訪れる人もいる。一般の観光旅行では、旅行者は観光資源を見聞きする、という「情報入力」をすることの方が多いが、聖地巡礼者は、様々な表現、つまり「情報出力」をする旅行者なのである。今では、SNSなどですっかり当たり前になった、「情報発信する旅行者」の先駆けであったのだ。

こうした表現物は、メディアの役割を果たす。地域住民には、アニメのファンが来訪していることを示すものとして機能し、同じ巡礼者には、自分の他にも聖地巡礼を行っているものがあることを知らせる機能を持つ。地域住民の中には興味を持ち、巡礼者たちに話しかける人が出てくる。そこで、巡礼者たちからアニメの舞台になっっていることを知らされ、作品を視聴するなどして、自地域が描かれていることを知る。巡礼者の中には、ファン同士あるいは地域住民との間に関係性を構築していく人も出てくる。そうすると、リーダーとなり、繰り返しその場所を訪れる。

何度もその場所を訪れているうちに、巡礼者は単なる「よそ者」ではなく、作品やその地域を「自分事」と捉えるようになっていく。作品や地域の魅力をより多くの人々に知ってもらいたいと考えるようになり、様々な取り組みに協力したり、自分からイベントやグッズの企画を地域住民に提案したりし始める。いわば、能動的に地域振興に関わる役割を担うことになるのだ。

たとえば、アニメ『らき☆すた』の聖地である

たケースや、特に地域振興に発展しなかったケースもあるが、少なくない地域で、アニメファンと地域住民、そして、場合によってはコンテンツ製作サイドも協働し、観光・地域振興に発展した。こうした、コンテンツをきっかけにした旅行行動や観光振興のことを「コンテンツツーリズム」と呼ぶ。

コンテンツツーリズムが地域にもたらすもの

コンテンツツーリズムという語は、2005年に国土交通省、経済産業省、文化庁が共同で出し

埼玉県久喜市鷲宮^{わしのみや}では、地元の土師祭^{はじさい}でファンと地域住民、コンテンツ製作者が協働で「らき☆すた神輿」を出している。発案は聖地巡礼者と密に関わりを持っていた地元の商店主である成田靖氏だ。氏は無類の神輿好きで、私がインタビューをした際には、自らを「神輿オタク」だと語った。彼が営んでいた洋品店は、『らき☆すた』の鷲宮限定グッズの販売店になっていたため、聖地巡礼者がよく訪れていた。

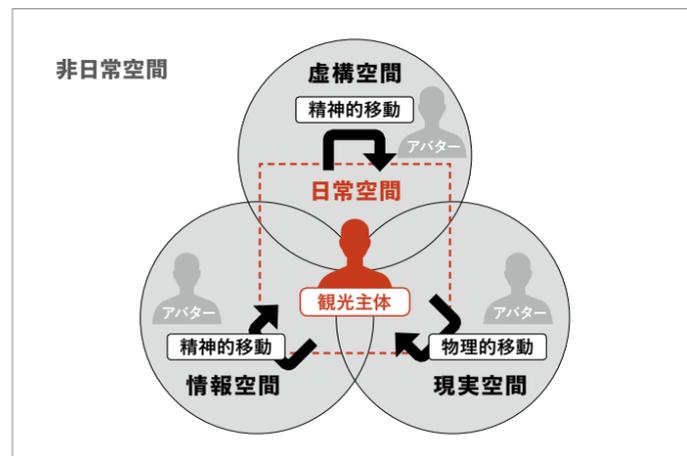
成田氏は巡礼者の薦めで『らき☆すた』を視聴したが、「あまり面白さはわからなかった」という。ではなぜ、「らき☆すた神輿」を発案したのかと問うと、成田氏は次のように話した。「俺も神輿好きだけど、わからん人にはわからんからね。『らき☆すた』はよくわからんけど、俺にとっての神輿があいつらにとっては『らき☆すた』なんだったことはわかる。そうして、「らき☆すた神輿」のアイデアを思いつきファンに話したところ、好感触が得られ、地元商工会を通じて『らき☆すた』の製作委員会からも許諾を得て、実施した。担ぎ手は全国から募集し、2008年9月の土師祭で担がれ始め、2018年には10周年を迎えた。成田靖氏は、2018年1月に急逝したが、その後も、神輿オタクの想いは巡礼者に受け継がれ、『らき☆すた神輿』は継続して担がれている。こうした地域住民と巡礼者、地域文化とコンテンツ文化の融合が、各地のアニメ聖地で見られるのだ。

しかし、疑問も残る。情報発信をする旅行者であるからといって、それは同時に地域を愛することにはつながらない。逆に、「インスタ映え」や「きれいな写真」のために、花畑の中に分け入ったり、立ち入り禁止の場所に踏み込んでしまったりして、問題になるケースが後を絶たないのではないかと。

た「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」という報告書で定義された。報告書の中では「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、マンガ、ゲームなど）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」であると説明されている。観光のみならず、関連産業の振興も意図している点が特徴的だ。

筆者は、このコンテンツツーリズムという言葉をも、より広い意味で用いている。「コンテンツ」をいわゆる「作品」のみならず「人に楽しさを生じさせる情報」と捉え、それによつた旅行や

■図：「聖地巡礼」における3つの空間と人の移動



観光主体であるファンは日常空間を離れ、3つの空間を旅行者として、またアバターとして自由に行き来する。

地域と旅行者の間の3つの空間と3つのアクセス

こうした巡礼者と地域の関わりを説明するために、「3つの空間」と「3つのアクセス」の概念を用いたい。筆者は、現在の観光主体は3つの空間を移動すると考えている。すなわち「現実空間」「情報空間」「虚構空間」である(図)。

「現実空間」とは、我々の身体が存在する物理的な空間である。「情報空間」は、メディアによって接続可能な空間である。たとえば、ネット上の電子掲示板やSNS、動画投稿サイトなどを「情報空間」とみなす。実際に空間があるわけではない。

紡がれる。コンテンツを体験した人は、喜びや怒り、楽しさや悲しさといった感情を喚起される。そうした感情と、描かれた場所が重なった時、その場所に行ってみたいと思うのである。

そして、これは何もアニメ作品のファンに限った特殊な話ではない。全国高等学校野球選手権大会に心を揺さぶられて甲子園球場に行く、テレビで見たアイドルやミュージシャンの魅力に惹かれてライブに赴く、歴史を学んで武将の生きざまに感銘を受けてゆかりの場所を訪れる……。これらは全て「感性的・感情的アクセス」で心の距離が近くなったことをきっかけに、より知りたくなり、より物理的に接近したくなる行動だと言える。

聖地巡礼が育む

「ハイブリッドコミュニティ」への期待

アニメ聖地の現場では、その地域に住む人々と、そこを定期的に訪れる巡礼者(よそ者)が一緒に新たな新たなコミュニティが見られる。それは、現実空間上だけでなく、情報空間上でもアクセスを続けることで維持されている。興味、関心を同じくして集まったコミュニティである。

地域の人々とアニメファンが連携を取り結んでいる地域では、地域のコミュニティとネットのコミュニティ、そして、それらの成員が混在したコミュニティが出来上がる。筆者はこれを「ハイブリッドコミュニティ」と呼んでいる。こうしたコミュニティからは、地域住民だけでなく、ファンだけで考えても、ファンだけで考えられないアイデアや実践が創出される。それは「異種の価値観」が出会い、混雑する場になるからだ。当然、そこには価値観の齟齬やトラブルなども見られるが、他者が

■表：「聖地巡礼」における3つのアクセス

アクセスの種類	アクセスの仕方	強く関連する空間
① 物理的・身体的アクセス	現場での身体的体験。	現実空間
② 知識的・情動的アクセス	場所の価値・重要性について学習すること。現場を実際に訪れないで行う学習もありうる。	情報空間
③ 感性的・感情的アクセス	地域に対する親近感がわく状態。これも現場を実際に訪れないで感じる場合もありうる。	虚構空間

く、あると「想定される」空間だ。実際の空間としては、現実空間上のサーバ内にあるが、ウェブページを閲覧することを指して「ネットサーフィン」や「ネット巡回」といった移動の比喩表現を用いているのを考えると、空間が想定されていることがわかるだろう。

最後に「虚構空間」とは、コンテンツが描き出す空間を指している。こちらにも、実際に空間が存在するわけではない、コンテンツの体験者によって想定される空間だ。物語世界や作品の世界観といった言い方をしてもよいだろう。人々は、現実空間に身体を置きつつ、情報通信機器を通じて、

出会い、うまく交流が進めば、どちらにとっても「創造的」な取り組みを実現することができ、その成果物は、さらに新たな旅行者を呼びこむメディア的機能を持つ。

うまくいっているアニメ聖地には、このハイブリッドコミュニティを維持する「ハブ」となる地域住民やファンが見られる。アニメファンの気持ちと地域住民の立場の双方がわかる人や、そうした交流が継続的に行われる場が存在することが多い。異なる価値観を異なる価値観として認めながら、それぞれが生き生きと過ごせるコミュニティを生み出すきっかけとして、コン



ファンと地域、コンテンツホルダーのコラボレーションで生まれたグッズ類。驚宮で売られている『らき☆すた』の携帯ストラップ(上)や、作品ごとの同人聖地ガイドブックの数々(下)。©美水かがみ/らっきー☆ばらだいす

情報空間や虚構空間を想定しながら移動していると考えられるのだ。

次に、旅行者が地域とアクセスする際に3つの状態があることも整理しておこう(表)。1つめは、「物理的・身体的アクセス」である。これは、現実空間上で、旅行者が地域と近づくことを指す。つまり、一般的な観光のことだ。2つめは「知識的・情動的アクセス」であり、地域に関する知識や情報を得ることを指す。これは、現場に行ってもアクセス可能だ。たとえば、ある地域の観光ガイドブックを自宅で読んでいる状態がそれにあたる。そして、3つめは「感性的・感情的アクセス」である。これは、地域に対する親近感がわく状態を指す。こちらも現地に行かなくてもアクセス可能だ。

前者2つはわかりやすいが、「感性的・感情的アクセス」は、なじみが無いかもしれない。しかし、「よそ者」や「旅行者」がその場所を訪れるのに、非常に重要なアクセスである。考えてみると、旅行者は、この「感性的・感情的アクセス」が無いと、そもそも観光にでかけない。人は、「行くのにとっても苦勞し」、「その場所のことを知らず」、「なんの感慨もわかない」ような場所を訪ねようとは思わない。観光は、なんらかのメディアから、なんらかの情報を得て、そのことを元に、その場所を訪れてみたいと感じることから始まるのだ。特に、「感性的・感情的アクセス」は、その他の2種類のアクセスを駆動するモチベーションとして重要なのである。

この「感性的・感情的アクセス」をドライブするのには、コンテンツは大きな役割を果たす。アニメ作品であれば、キャラクターが描かれ、物語がテンツツリズムは大きな可能性を秘めているのだ。

繰り返しになるが、この時のコンテンツは、何もアニメやマンガ、ゲームなどに限らない。コンテンツは「人に楽しさを生じさせる情報」だと考えると、人が楽しさを引き出せる対象は無数にある。コンテンツは人の想像力によっていくらかでも創造可能だ。そうした多種多様なコンテンツを元に集まった人々による、アクティヴで創造的なコミュニティが日本の各地域に出来ることこそ、地方創生の真の姿ではないだろうか。

移民が「よそ者」になるとき、 ならないとき

高谷幸
Takaya Sachii

2018年に外国人労働者受け入れ拡大のための法改定が行われ、移民社会としての日本が本格的に顕現してきた。移民を「よそ者」と見なし距離を置くのはたやすいが、最早それでは日本社会の持続可能性を保つていくことは難しい。同じコミュニティの構成員として、移民をどのような理念で捉え、協調していくべきなのか。日本における移民受け入れの流れを見渡しなが、この先これからの視座を考察する。

移民と「よそ者」

以前、日本で活躍されている中国人ジャーナリストの方に話を聞いたことがある。中国から日本に留学し、卒業後、日本でずっと仕事をしてきた彼は、私が話を伺ったときはすでに日本で20年以上暮らしていた。彼の話のなかで一番印象に残ったことは、それだけ長く住んでいても「いつ中国に帰るんですか？」と日本人から聞かれることがあり、「悲しくなる」というエピソードだった。おそらく、質問者からすれば何気ない問いかけだろう。しかし、このジャーナリストからすれば、自分は「いつか帰る人」で、日本社会のメンバーとは思われていないと感じる瞬間なのだ。

19世紀末から20世紀前半に、現在のドイツで活躍した社会学者のゲオルク・ジンメル（1858～1918）は、「よそ者」について、次のように述べている。

……よそ者とは、これまでよく言われてきたように、今日来て明日去っていく人という意味ではない。むしろ今日来て明日とどまる人——いわば潜在的放浪者という意味だ。……彼は一定の空間領域——ないしは空間と似たような形で境界が定められている領域の内部につきなぎとめられている（ジンメル『よそ者についての補論』G・ジンメル『ジンメル・コレクション』北川東子編訳・鈴木直訳、ちくま学芸文庫、1999年）。

つまり、ジンメルという「よそ者」とは、「今日来て明日去っていく人」（ここでは「旅人」と呼んでおこう）ではない。一方で、彼の表現をもじっていえば「昨日からいて明日もとどまる人」（ここでは「ネイティブ」と呼んでおこう）でもない。「よそ者」とは、「外」からやって来つつ「内部につきなぎとめられ」た者、つまりコミュニティのメ

たかや・さち
大阪大学大学院人間科学研究科准教授。1979年奈良県生まれ。神戸大学法学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科修士。専門は社会学・移民研究。著書に『追放と抵抗のポリティクス——戦後日本の境界と非正規移民』（ナカニシヤ出版）、『著に「移民政策とは何か——日本の現実から考える」（人文書院）がある。

ンバーになった者であり、これからもそこにとどまる人である。ジンメルはまた、この「よそ者」の特徴を、その人の属性としてではなく、彼と集団との関係に見出ししている。すなわち「よそ者」とは、「集団に内在し、その構成員としての地位を保つと同時に、集団の外側に立ち、集団に立ち向かう要素を含んでいる」という（前掲書）。それゆえこの定義にしたがえば、移民の子や孫として移動先で生まれた者のように、「外」からやってきたわけではないが、「集団の外側に立」っているように見なされがちな「よそ者」もいる（図1）。こうした者も含め、「よそ者」の位置における人びとは、歴史上、多くの社会に見出されてきた。ジンメルは、商人やユダヤ人をその例としてあげている。その後、ジンメルの影響を受け、シカゴ大学で社会学の教鞭をとったロバート・パーク（1864～1944）とその弟子たちは、当時、シカゴに急増していた移民に注目した。彼

らは、欧州からアメリカに渡ってきた移民たちが様々な障壁に直面しながらも、自分たちの「居場所」を築いていく過程や、その移民たちの営みが都市、社会を形成していくありさまを描き出した。社会学的にいえば、彼らの研究が「都市社会学」という学問分野を打ち立てたのだが、ここからみえてくるのは、「よそ者」の象徴として捉えられた移民が、その後「市民」となっていくというアメリカの歴史である。

では、日本はどうだろうか。冒頭のジャーナリストのエピソードから考えると、日本に暮らす移民は、「よそ者」としてよりもむしろ、「今日来て明日去っていく人」つまり「旅人」と見なされがちなのではないだろうか。

日本における移民

日本に暮らす移民は増加傾向にあり、そのうち外国籍をもつものだけでも、2018年末に約273万人と、人口の2%を超えた。国籍別では、中国、韓国、ベトナム、フィリピンが多く、近年はとくにベトナム国籍者の増加が著しい。人口の2%というと欧米諸国などと比較するとまだ割合は低いようにみえるかもしれないが、地域差は大きく、外国籍人口が10%を超える自治体もある。また帰化者や国際結婚をした両親から生まれた子どもなど、移民や移民ルーツの人びとのなかには日本国籍をもつ者も少なくない。さらに、働いている外国籍者に焦点を絞っても、2013年には約72万人だったその数は、2018年には146万人と、5年間で倍増した（図2）。

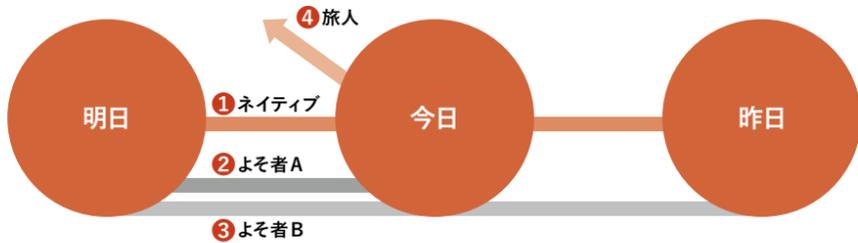
この背景には、経済回復や東京五輪の準備などによる短期的な人手不足のみならず、高齢化にと

もなう労働力人口の減少という長期的な傾向があると考えられる。こうしたなか、政府は、2018年、人手不足を理由として初めて移住労働者の公式な受け入れを決めた。しかし同時に政府は、これを「移民」の受け入れと見なすことを拒否している。この意図を理解するために、これまでの日本の移民受け入れについて振り返ってみよう。

戦後日本には、在日コリアンや台湾、中国人など移民や移民ルーツの人びとが暮らしてきた。その後、1980年代に入って、東南アジアや南アジアなどからの新しい移民の流れが目立つようになった。彼・彼女らの多くは、観光などの目的で入国し、在留期限が切れた後も働く「オーバーステイ」だった。

彼らの急増を受け、1989年に政府は出入国

■図1：移民とコミュニティの相関イメージ

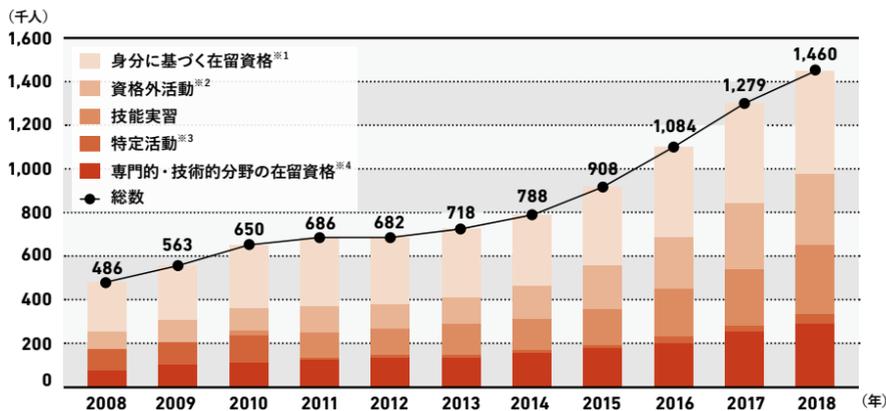


ジンメルが提示した「よそ者」の特徴になぞらえ、コミュニティの構成員をそれぞれ

- ①ネイティブ：昨日からいて明日もとどまる人
- ②よそ者A：移民。今日来て明日とどまる人
- ③よそ者B：移民の子や孫など外からやってきたわけではないが、集団の外に立っているように見なされがちな人
- ④旅人：今日来て明日去っていく人

に分類し、各々の関係性を仮定してみたもの。

■図2：在留資格別外国人労働者数の推移



※1 我が国において有する身分又は地位に基づくものであり、永住者、日系人等が該当する。
 ※2 本来の在留目的である活動以外に就労活動を行うもの（原則週28時間以内）であり、留学生のアルバイト等が該当する。
 ※3 法務大臣が個々の外国人について特に指定する活動を行うもの。
 ※4 就労目的で在留が認められるものであり、経営者、技術者、研究者、外国料理の調理師等が該当する。
 資料：厚生労働省「外国人雇用状況の届出状況（平成30年10月末現在）」

管理及び難民認定法（以下、入管法）を改定し、翌年施行した。ただしここでは、「専門的・技術的分野における外国人労働者は積極的に受け入れる一方で、いわゆる『単純労働者』の受け入れは認めない」という方針が確認された。一方、この法改定とあわせて、日系3世とその家族に、親族訪問という名目で「定住者」という在留資格が認められることになった。この結果、ブラジルやペルーなどから日本への「デカセギ」が増加することになった。

また1993年には、外国人研修・技能実習制度が発足した。この制度は、もともと人材育成を通じた技能等の移転による国際協力の推進を目的として1960年代に始まった研修制度に端を発している。その研修制度に後続し、より実践的な技能を身につけるという目的で外国人技能実習制度が設立され、あわせて「外国人研修・技能実習制度」として運営されることになった。しかし現実にはこれは、人手不足に悩む中小零細企業が安価な移住労働者を受け入れる制度として機能することになった。実際、低賃金、転職の自由が認められないこと、強制帰国など、劣悪な労働条件や人権侵害がたびたび問題になり、何度か制度改定もなされてきた。2010年には、研修と切り離し、1年目から労働法の適用が認められる外国人技能実習制度となったが、根本的な問題は変わらなかった。一方で、制度の緩和もなされ、受け入れが認められる職種や年数も拡大され、技能実習生数の増加につながってきた。2018年には約33万人がこの制度下で働いており、同制度は、日本における移住労働者受け入れの主要な経路として機能している。くわえて近年は、主に技能実習生の受け入れが認められていない飲食サービス業

■図3：「特定技能」労働者の在留要件

	特定技能1号	特定技能2号
在留期間	通算で上限5年まで	更新可能
家族帯同	不可	可
永住	2号への移行後に可	可
必要な技能 [※]	相当程度の知識または経験	熟練した技能
必要な日本語能力 [※]	試験などで確認	なし
職種	特定産業分野（14分野） 介護、ビルクリーニング、素形材産業、産業機械製造業、電気・電子情報関連産業、建設、造船・船用工業、自動車整備、航空、宿泊、農業、漁業、飲食物品製造業、外食業	建設、造船・船用工業

※「必要な技能」「必要な日本語能力」は、技能実習からの移行の場合、試験は免除される。
資料：出入国在留管理庁「新たな外国人材の受け入れ及び共生社会実現に向けた取組」

や小売業などで「留学生」の雇用が増加している。このように、日本における移住労働者の受け入れには、『単純労働者』の受け入れは認めない」という建前を維持しつつ、実際には、別の目的で受け入れた日系人、研修生、技能実習生、留学生が、非熟練労働市場で働くという、建前と現実のズレがあった。それゆえこうした受け入れは、「サイドドアからの受け入れ」と揶揄されてきた。

「旅人」にとどまらせる力としての法制度

さて2018年の法改定による移住労働者の受け入れ拡大は、このような歴史をある程度転換するものである。というのも、前述のように、人手不足を補うためには移住労働者が必要ということに初めて公式に認められた受け入れだからである。

一方で、この法改定には、「定住化の阻止」という点で、これまでの政策との連続性も見出せる。これは、日本での就労・滞在期間の上限を定め、家族帯同も認めないことで、可能な限り定住させない形で、移住労働者を受け入れようとする方策である。いわば、「今日来て明日去っていく人」つまり「旅人」のような形で、移住労働者を受け入れようとするものといえるだろう。

もともとこの方針は、1989年の入管法改定をめぐる議論のなかで浮上し、就労・滞在期間に上限があり、家族帯同も禁じられている外国人研修・技能実習制度として制度化された（梶田孝道「日本の外国人労働者政策」梶田孝道・宮島喬編『国際社会1 国際化する日本社会』東京大学出版会、2002年）。その後、前述のように、この制度は拡大、緩和されてきた。「定住化の阻止」という方針が、日本の受け入れ政策のなかで主流化して

時に、集団の外側に立ち、集団に立ち向かう要素」をもっているのだった。

そして、この「内」にしながら「外」の視点ももつという点が、「よそ者」がまちづくりに新しい視点をもたらす存在として注目されている理由だろう。これは、地域社会に定住した移民の場合も同様であり、コミュニティに新しい視点をもたらし地域の活性化に一役買っている移民も珍しくなくなっている。

岡山県総社市は、そうした移民の社会参加を積極的に進めてきた自治体の一つである。市の職員にブラジル出身者の譚俊偉さんを雇用し、譚さんや他の通訳スタッフが、地域に暮らす移民たちの相談にのる体制を整えた。この結果、移民コミュニティと自治体や地域のつながりができ、一緒にイベントを企画するようになった。また災害時には、移民たちもボランティアとして、被災者支援に取り組んでいる。彼らを支えてきたNGOの代表の方にお話を伺った際、異なる背景をもつ人びとの存在は「お荷物」ではなく「財産」であることを強調されていたが、移民たちは、社会参加を通じて、ますますコミュニティの「財産」として評価されるようになっていく。

ただ一方で、「よそ者」がもつとされる「ネイティブ」との違いを「財産」かどうか判断するのは誰か、という問いは残る。「よそ者」はコミュニティのメンバーではあるものの、そのコミュニティの「ネイティブ」との関係を見た場合、社会構造上、優位な立場に立つ「ネイティブ」の方が力をもっていることが多い。そうした力関係を背景に、「よそ者」を評価するのは、「ネイティブ」であり、それもネイティブ自身が設定した基準によってであることが少なくない。たとえば、国際

きたといえる。さらにそれは、2018年の入管法改定によって創設された在留資格「特定技能」にも引き継がれている。すなわち「特定技能」労働者は、まず「1号」を取得し、介護、外食業、農業、建設、造船・船用工業など14分野で最大5年間働くことができる。だが、「1号」修了者が移行でき、家族帯同や在留期間更新が可能。「2号」は、2019年8月時点で建設、造船・船用工業の2分野にしか設けられていない。これ以外に、資格を取得すれば、別の在留資格に移行できる介護をあわせても3分野で働く「特定技能」労働者しか定住につながらない仕組みになっている（図3）。

実際、この法改定を、安倍政権は「移民政策」ではないと述べている。具体的には「外国人材の在留期間の上限を通算で5年とし、家族の帯同は基本的に認めない」ことが「移民政策」とは異なる点だという。ここには、移住労働者を「今日来て明日去っていく人」として受け入れようとする政府の姿勢が如実に表れている。

このように、日本では、人びとの認識だけでなく法制度や政策によっても、移民を「今日来て明日去っていく」「旅人」にとどまらせようとする力が働いているといえるだろう。

「よそ者」／「ネイティブ」の区別が意味をもたなくなるとき

しかし現実には、日本に暮らす外国籍者のうち100万人以上が永住資格をもち、それ以外の一定程度安定した在留資格をもつ人を含めると、半分以上になる。在日コリアンなどの旧植民地出身者のほか日本人と国際結婚した人や、日系人など、日本人との「家族的つながり」をもつ人が多い。

結婚で地方に定住したフィリピン女性は、日本のジェンダー規範をもとに、家事や高齢者のケア役割を献身的に担い、「伝統的で理想的ないいお嫁さん」として、周囲から評価されているという（Faier, L., 2009, Intimate Encounters, Berkeley: University of California Press）。人間社会で生きる以上、他者からの評価は避けられないのかもしれない。しかし、両者に横たわる力関係の下、「よそ者」が、「ネイティブ」の評価的なまなざしから逃れることは難しい。

こうした一方的な関係が乗り越えられるのは、「よそ者」と「ネイティブ」の力関係が揺らぎ、彼らが区別されなくなるときなのかもしれない。これは決して、「よそ者」が「ネイティブ」に同化することを意味するわけではない。むしろコミュニティ自体が多様化し、「よそ者」と「ネイティブ」の区別が意味をもたなくなったときである。そしてそのときに初めて、「よそ者」だけでなく、誰もが「その人らしき」という意味での「違い」を発揮できるのではないだろうか。とするとならば、おそらく変わらなければならないのは、「よそ者」を評価し、彼らをコミュニティに含めるかどうかを決めるのは自分たちだと信じて疑わない「ネイティブ」の方なのだ。

人と地域を結ぶなにわの伝統野菜

「玉造黒門越瓜」ツルつなぎ「収穫祭」レポート

米田茉衣子 取材・執筆

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所が2008年から継続して取り組んでいる、「玉造黒門越瓜」ツルつなぎプロジェクト。
玉造稲荷神社が百年ぶりに地元で復活させた伝統野菜の種を、地域の人びとが共に育て、食し、広めていくことで、新たな交流を生み出している。プロジェクトの動向と、8月4日に開催された収穫祭の様相をレポートする。

なにわ名物として人気を博した「玉造黒門越瓜」

「なにわの伝統野菜」のひとつとして大阪府・大阪市に認証されている、「玉造黒門越瓜」。その長い名前には、この野菜が辿った歴史が詰まっている。大坂・玉造周辺は、安土桃山時代、豊臣秀吉が造った大坂城の外郭(惣構)の内側にあたり、豊臣方の大名らが住む武家屋敷が並んでいた。しかし、大坂夏の陣ですべて焼失。江戸時代に、地域の有力者だった高津屋吉右衛門が幕府の命を受け、この土地を畑地として再開発した。高津屋はここで瓜を栽培し、その販売に力を入れた。これが玉造のブランド

野菜「玉造黒門越瓜」の誕生である。「黒門」とは、大坂城の玉造門が黒塗りで、別名「黒門」と呼ばれたことに由来する。玉造には、明治時代まで続いた白瓜市場があり、この市場も別名「黒門市場」と呼ばれた。「越」は、古代中国の長江の南にあった越の国の意味。瓜は原産地の北アフリカから方々に伝播し、インド・東アジアを経由して中国に伝わったものが越瓜となり、弥生時代頃に日本に渡来したのではないかとされる。

工程でできる酒糟が組み合わされ生まれたのが、玉造名物の奈良漬である。当時、玉造は大坂と奈良や伊勢を結ぶ玄関口で、お伊勢参りに出かける人びとの出発地として大いに賑わい、町には茶店や笠屋などの店が軒を連ねた。味がよく日持ちのする名物「玉造黒門越瓜の奈良漬」は、伊勢参りの旅人たちの旅のお供や土産として人気を博した。その名は、江戸時代の名物名産略記や番付などの記録にも散見され、当時の人気がうかがい知ることが出来る。

百年ぶりに玉造の地で復活 伝統野菜を通じて広がる人の輪
時を経て、その「幻の瓜」に注目したのが、玉造稲荷神社の禰宜・鈴木伸廣さんだ。鈴木さんは神社や地域の歴史について古い文献を調べるなかで、玉造黒門越瓜の存在を知り、この伝統野菜を玉造の地で復活させることはできないかと考えた。当時、



玉造黒門越瓜は、縦縞が8本ほどあるのが特徴。

大阪府立食とみどりの総合技術センターで在来種の研究をしていた森下正博さんに連絡を取り、大阪府内で栽培・保存されていた種の入手方法や、育て方を知ることができた。森下さんや地域の人びとの協力を得ながら境内の一角で栽培し、2003年、みごとに玉造で玉造黒門越瓜を復活させたのだ。以来毎年、神社では瓜の栽培が行われ、夏祭りに合わせて瓜料理を参拝者にふるまう「玉造黒門越瓜の食味祭」が開かれている。

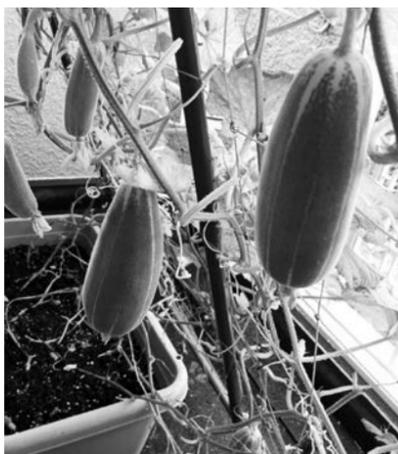
紡いでいく、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所の「U・I・C・O・R・Oプロジェクト」は、鈴木さんへの取材を通して、越瓜と出会い、越瓜のダイナミックな盛衰ドラマや、個性豊かな人びとを結びつける可能性に着目。コミュニティ・デザインの実践研究として、「玉造黒門越瓜」ツルつなぎプロジェクトを2008年に開始した。

園などそれぞれの形で、瓜を育てていく。育成の様子はWEB上の新聞で共有するほか、収穫期には、参加者が瓜料理を持ち寄り収穫祭を開催。瓜を育て共に食すことを通して、人びとのつながりを豊かにしていこうというものだ。参加者は年々増加しており、現在では地域の30軒以上の施設や家庭が瓜作りに取り組んでいる。大阪府下や兵庫県、奈良県など玉造以外の地域でも栽培者が増え、瓜を通じた人の輪が年々広がりを見せている。

プロジェクト参加者の交流の場 盛夏の「ツルつなぎ」収穫祭
では、8月4日に開催された「玉造黒門越瓜」ツルつなぎ「収穫祭」の様子を紹介しよう。本イベントは今年で12回目。大阪ガス(株)の実験集合住宅「NEXT21」で毎年開かれている。
開会を前に、オリジナルの瓜料理を携えた参加者たちが到着。めいめい包みから手料理を取り出し、会場のテーブルに置いていく。定



上/玉造稲荷神社境内の瓜畑と越瓜の碑。
左/江戸時代、瓜はらせん状や半分に切ったものを干して保存食としても盛んに食された。
『四季漬物鹽嘉言』小田原屋主人 天保7(1836)年



上/ベランダのプランターで育てられる越瓜。
右/越瓜の種は、玉造稲荷神社が提供する。





上/収穫祭には約60人が参加。中左/加藤元樹・薫夫妻による紙芝居。中右/ヴァイオリンを演奏する森下正博さん。下左/収穫祭には子どもの姿も。下右/中越慈子さん。

番の和食から中華、フレンチ、イタリアン、さらには中東風まで、バラエティ豊かで美しい料理が所せましと並んだ。この日のために丹精込めて作った料理を前に、参加者同士の会話に花が咲くなか、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所弘本由香里研究員による開会の

挨拶と参加者の紹介が行われた。次に、参加者による料理の紹介。「越瓜とパプリカのイタリア風サラダ」「昔ながらの奈良漬け」「越瓜とベーコン等の甘酢あんかけ」「越瓜のクスクス」「越瓜のコンフィチュール」……今年の栽培のエピソードを交えながら、オリジナリティあふれ

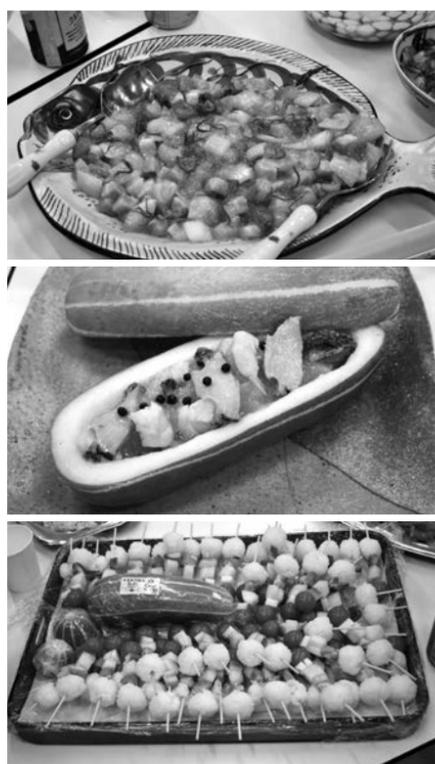
収穫するのは難しいんです。今年は、夫が天王寺区の講座で草花の育て方を教わり、栽培方法を改善して3個ほど収穫できそう。どうやったら大きくなるのかなど試行錯誤するのは、続けるうちに面白くなりましたね」

栽培は容易ではないようだが、参加者は情報を共有し、各々策を凝らしながら、瓜の育成に取り組んでいるという。

会の間、流麗なヴァイオリン演奏を披露した森下正博さんは、長年にわたり大阪で伝統野菜の振興に携わってきた。越瓜をはじめとしたなにわ伝統野菜の復興の動向を「大阪らしい動き」と捉える。

「なにわ伝統野菜は、市全体、府全体での画一的な取り組みではなく、それぞれ小さいコミュニティを大事にしながら、地域の人が野菜を育み振興している。人のマネはしたくない」という大阪の気質を反映しているか、「個々のパーソナリティを出して楽しもう」とするやり方で活動しているのが特徴ですかね」

また、玉造黒門越瓜が社会包摂の場で育まれている例もあるようだ。生野区で障がい者支援をしているNPO法人「出発(たびだち)のなかまの会」では、空き家の庭を活用し、地域の誰もがつながられる場所としてコミュニティ・ファームを開設。その畑で玉造黒門越瓜



上から「越瓜とベーコン等の甘酢あんかけ」「玉造黒門越瓜 干し鮑 白才海老 白湯煮込み」「越瓜とおにぎりの串だんご風」。

を栽培している。農作業を通じ、障がい者、地域の方、外国人留学生などさまざまな人びとの交流が生まれているという。

地域を巻き込み、季節の風物詩に

今年の収穫祭に参加したのは約60人と過去最多。年々数を増やし、幅広い年齢層の多彩な顔触れが越瓜作りに関わっている。こうした多くの人びとのつながりを生み出したのは、「伝統野菜である玉造黒門越瓜の力」と、本プロジェクトを推進した弘本由香里研究員は話す。

「伝統野菜は地域の歴史のひとつですから、そこに興味を持つ人は多い。それで気軽に参加してもらって育ててみたら、栽培の奥深さにハマって

る創作料理の数々が披露された。どの料理も制作者の創意工夫が感じられ、料理のバリエーションの幅広さに驚かされた。気になる玉造黒門越瓜の味だが、透明の果肉は瑞々しくあっさりとしていて、瓜特有の青臭さが無い。さまざまな食材や味付けと組み合わせるアレンジが可能で、料理に上品な涼やかさを添えていた。さらに、玉造稲荷神社の向かいにある仏料理店「レストランリール」、本誌ではお馴染みの日本料理店「かこみ」の協力により、プロの手による玉造黒門越瓜を使った創作料理も届けられた。「瀬戸内六穀豚と越瓜の白ワイン煮込み(リール)」、「越瓜と鱧のサラダ」(かこみ)など、プロならではの技術と発想で瓜の魅力を引き出した料理が提供された。会の途中では、大阪くらしの今昔館でボランティア・町家衆として活

しまう人が続出して。まさにプロジェクトの名の通り、越瓜のツルが伸びていくかのように、多くの人がつながっていったんです」

さらに弘本研究員は、伝統野菜の復興には、種の多様性を見直す意味もあると語る。

「バラエティに富んだ伝統野菜が細々とでも残っているのは、大阪の周縁部で、流通にのせるような農業ではなく、小規模な農業をしている方がいたためです。弱くてばらつきをもった種の多様性があることによって、逆に社会や環境の変化の圧力に耐えてこられた、ということに面白さがあります。在来種である伝統野菜のこうした特徴から、人類、特に都市生活者は学ぶことがあるのではないのでしょうか」

最後に、今後のプロジェクトの展

動している加藤元樹・薫夫妻が、紙芝居「大阪なにわ伝統野菜のお・は・な・し」(原作:志村敏子、紙芝居制作:大阪くらしの今昔館+大阪教育大学学生)を上演。ユーモラスな語りによるなにわ伝統野菜の紹介に、会場は笑いに包まれた。

最後は、一本締め代わりに、大阪市立玉造小学校の活動で作られた「玉造くろもんしろりうた」をヴァイオリン演奏にあわせて合唱し、今年の収穫祭は和やかに幕を閉じた。

家庭、子ども食堂、コミュニティ・ファーム

各所で実る玉造黒門越瓜

会場に参加者の方たちに話を伺った。此花区で「此花子ども食堂」を運営する角林佳代子さんは、今年初めて越瓜の結実に成功したことを嬉しそうに報告してくれた。

「以前から、阪南市の農家からこども食堂に玉造黒門越瓜を提供されていて、越瓜の漬物を作って皆で食べていました。それで、自分でも挑戦してみようと。昨年はうまくいかなかったのですが、今年は資料などを参考にして雌花に受粉したら、1個だけ実がなりましたよ」

天王寺区で観光ボランティアガイドをしている中越慈子さんは栽培歴11年。「玉造黒門越瓜は昔のまま品種改良されていないため、たくさん

望について何うと、「季節の風物詩として定着させていきたい」と抱負を述べた。

「このプロジェクトには、まちづくりに関わる人や子どもたちの育ちを応援する人など、今の社会に対して問題意識をもって活動するさまざまなバックグラウンドの人が集まっています。これから、このプロジェクトが起点となって、さらに新しい取り組みが展開していくことも期待しています。そうした方たちのつながりを紡ぐ場として、これからも続けていけたらいいですね」

江戸時代から長い年月と多くの人の手を経て、今につながる玉造黒門越瓜の系譜。現在も人と地域、人と人をつなぎ、そこに新たな物語を紡ぎ出している。



収穫祭当日の様子は、WEB上で公開されている「上町コロコロ新聞 しろうりNEWS」でも紹介されている。

認知症の本質を知り、共に生きるために 第2回「高齢社会2030を考える会」報告

加藤しのぶ 取材・執筆

2030年に迎える超高齢社会の具体的な姿をイメージし、今取り組むべきことを参加者と考えようと思ったのが大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所主催「高齢社会2030を考える会」だ。その第2回が2019年5月28日に開催された。テーマは「認知症」。参加者にとってこれまでの認知症への意識を変える、有意義なものとなった。

認知症の「本質」を知る —— 共感的理解の重要性

考える会第2回のテーマは「認知症 それがどうした!と笑い飛ばせる地域社会の未来」である。

第1部は田中雅人大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)所長の挨拶の後、小川敬之京都橋大学健康科学部教授が登壇した。小川氏は作業療法士などを経て現職に就く傍ら、NPO法人の理事長として認知症と共生する社会づくりの実践活動にも取り組んでいる。

講演では冒頭に「認知症の本質的なところを感じ取ってもらえれば」と前置きしたうえで、さまざま

データ等を提示しながら、認知症の捉え方そのものが世界的に変わってきていることをあげた。

認知症の中心的な症状は、かつては記憶障害と捉えられていたが、現在では社会的認知の障害、つまり自分自身や環境・物、そして人との関係が崩れていく「関係性の障害」と考えられているそうである。

たとえば、認知症の人は服を着る動作がうまく行えないというよう生活のいたる場面で周りからは見えない「つまずき」「混乱」をたくさん経験しており、それが重なることで不安や恐怖感、絶望感を抱いてしまい、しかもそれが目に見えないことが周囲の理解を阻んでいる。だからこそ、その生活支援には「その人



第2回「高齢社会2030を考える会」

実施日 2019年5月28日 17:30～19:30

会場 グランフロント大阪
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
都市魅力研究室

主催 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所

2030年の超高齢社会を見据え、地域でしなければならないことを参加者とともに検討する。第2回は、京都橋大学健康科学部教授の小川敬之氏をゲストに迎え、認知症患者との共生社会づくりの方向性を解説していただき、議論を交わした。

がどのような風景を見ていて、どのような混乱状況に陥っているのかを考えることが大切だ」という。これまで「認知症=世話を必要とする人」という偏った視点だけで捉えていたことを痛感しながら、小川氏の言葉で締めくくられた。

共に生きる —— 心を寄り添わせて

第2部では、先に池永寛明CEL顧問が登壇。社会全体の問題点として、急速に失われていく大阪言葉と背景にある文化の衰退、家族形態の変化による問題などをあげ、それに対応するためにも場と地域の力、家族の力をどうあげていくか、そのために大切になるのは文化であると語った。

続いて小川氏と池永氏の対談が行われた。家族形態の変化による関係性の構築の難しさについて池永氏が問うと、小川氏は「一緒に家にいることがいいことかどうかはわからない」とし、アニメ『もののけ姫』からの言葉「共に生きる」を借りながら、共にそれぞれが生きやすい環境を考え、共にその時代を生き、決してつながりが切れないようにする、「つながり方」の模索が必要と話したのが印象に残った。

その後参加者から寄せられた質問をもとに質疑応答となったが、専門的な内容から自身の介護経験に基づいたものまで、幅広い質問が多数寄せられた。参加者にとって、認知症の問題がいかに身近かつ喫緊の課題であるかがうかがわれた。たとえば、

「要介護3で施設に入っている親に対して家族ができることは」「施設にいる父は帰宅願望が強く、それができないために会いに行くのが辛い。これから父はどうなっていくのか」など、物理的に距離のある家族との向き合い方に関する質問に、小川氏は自身の経験談も交えながら、「大切なのは当事者のプライド、誇りを守るような関わり方をすること」と回答した。さらに「物理的な距離があっても心が一緒にいることが大事、『どうしているかな』『今日、行けなくてごめん』などと、一日一回『思うこと』を重ねていくだけで十分。そうすることである時ふっと行動が起きてくる」という言葉には勇気づけられた人も多かったのではないかと。共に生きるには心を寄り添わせること——そこから始めることから自分たちでもできる、と力づけられる時間となった。

終了後のアンケートも満足度の高い回答が多かった。*1。考える会は今後も引き続き、開催予定である。

注 *1.2 事例やアンケート回答の具体的な内容については、CELホームページ内遠座俊明研究員のレポート参照。http://www.wag-ceilp/information/1280104_15932.html



上/補助席を含めて満員になるほど、多くの参加者が詰めかけた。
左下/認知症の人の社会参加について熱く語る小川氏。
右下/認知症をめぐる家族のあり方について、議論を交わす小川氏(左奥)と池永氏(右)。

気になる」とし、先にあげた服の着方で混乱が始まった場合には、「仕切りなおす」ことで、できるはずの自分(プライド)をサポートするという事例や、認知症であっても有償ボランティアの形で働く宮崎や京都の施設での事例をあげた*1。

最後は認知症を特別な病気として捉えるのではなく、その症状も包み込むコミュニケーションの創生や、「だいたい仕事、たまにケア」といったハイブリッドワーキングシステムが構築できるような、「認知症、それがどうした」と言える日本になればと

私たちが考える万博

第2回 大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの

構成 加藤しのぶ

開催を6年後に控えた2025年大阪・関西万博。1970年の大阪万博から55年ぶりの開催となる万博をどう考えていくのか。池永寛明大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所顧問を中心に「大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜」などを通じて、多角的に考察していく。今回のテーマは「大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの」である。



池永寛明

いけなが ひろあき

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に人事勤務、営業部門にてマーケティングに関わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

「私たちが考える万博」連載第1回(前号)では、これまでの博覧会が行われた背景について考察しました。その視点として重要なのは、過去の万博をノスタルジーの目線で語るのではなく、過去から現代・未来につながる「時代の潮流・変化の構造」で捉えることです。1903(明治36)年の第5回内国勸業博覧会にはじまる大阪で行われた主要な博覧会の流れから、殖産興業や教育、消費文化の普及にとどまらない、都市・産業戦略の一環として開催されてきたことがわかりました。つまり、100年の計で大阪の近代化をもくろんだ、「大大阪」に至る明快なブランドデザインが背景にあったわけです。

博覧会が都市・産業戦略の一環で行われてきたものであるという文脈のなかで「大阪・関西万博2025」を考える場合、押さえるべき事項として「万博を大阪・関西で開催する必然性・現代性」についての考察があると思います。1400年の歴史をもち、シルクロードの終着点でもある関西は、世界のさまざまな文化と日本の本質を融合し、「日本的なるもの」といえる独自の洗練を生み出し続けてきました。日本人の知性と感性をもって、日本モード(様式)化するという翻訳・編集力に長けており、コードをモード化するためのベースとなる基盤である「日本プロトコル」を生み出している地です。



ナレッジキャピタルで開催されている「大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜」第3回の様子。世代を超えた熱心な討議が繰り広げられている。写真提供/ナレッジキャピタル

CELで3年にわたり進めてきた「ルネッセ(再起動)」の概念に通じるのですが、「大阪・関西万博2025」が世界に提案するものの核として、日本の現状を明確に押さえ、大阪・関西の持つ「日本的なるもの」の本質(コード)を掘り起こし、それを再編集し日本モード化して日本の再起動に結び付けていくことが重要になると考えています。

都市戦略としての万博

「日本的なるもの」をつくる「日本プロトコル」を生み出し続けてきた大阪・関西で開催

するという必然性をこの万博にどう埋め込むか、どう発信していくかを考えていかねばなりません。同時に、これまでの博覧会の背景に100年の計で大阪の近代化のブランドデザインがあったように、次なる100年先の社会に向けた実験場として、将来に向けた都市・産業戦略を描き、「大阪・関西万博2025」にて実験・検証するプロジェクトも立ちあげていく必要があります。ワイガヤサロンでは「こんな『大阪・関西万博2025』にしたい」というテーマから議論を始めました。そこであがったのは

「やるからには、史上No.1の万博にしたい」でした。史上No.1はこれまでの万博を超える——つまり、「超万博」。言葉だけならば簡単ですが、現実問題としていかに「超」えるか。70年万博の頃に「現場(会場)がすごい」というだけで人が集まる時代ではありません。かといってバーチャルを駆使した技術偏重でもいけない。単純な「リアル×バーチャル」といった枠組みを超える「超感性」をいかに発見・創造・提示できるかが重要です。ここでは、「史上No.1の万博『超万博』に向けた5つの考え方」をご紹介します。

史上No.1の万博「超万博」に向けた5つの考え方

① 超「技術」×超「感性」

—人間とはなにかを追求

- リアル×バーチャルという単純な図式にとどまらない超「技術」×超「感性」を具現化。
- 技術を超えるとは、人間とはなにかを追求すること。
- これからの社会における中核的思考とそれをつくり出す方法論の提示。

② 超「時間」×超「場所」

—世界はひとつ。世界をひろげる「時空間」を創出

- 「いのち輝く未来社会のデザイン」(今回の万博のテーマ)に向けて、IoT、AI、ロボット、VR、5Gなど最先端技術と、世界の文化とを融合して、新たな価値をつくりあげる実験場。
- さらに進化する技術と社会の融合により、時間と場所のボーダレス化、これまでの「時間と場所」の概念を超える社会実験場。

③ 超「交流」×超「混合」

—世界から「日本」に來たいと思う「理由」をつくる

- 1970年万博の「月の石」を超えるモノ・コトはなにか。
- 1400年以上も日本の中心地として日本的な文化を生み出し続けてきた大阪・関西がもつ世界各国・地域との交流と混じりあい、新たな価値を創造し続けてきた「日本のプロトコル」とはなにかを示す。
- IoT、AI、VRを超えるモノ、会場に來ないときできないコト、観られないコト、語れないコト、体験できないコト、参画できないコトを会場および会場で実現(とりわけ、大阪・関西に足をこぼさない体験できない、日本料理、人形浄瑠璃、歌舞伎、茶道・華道・書道・建築・庭園・料理など日本のミニマリズム経験を通して、それらの「本質」と「プロセス」を学ぶ場に)。

④ 超「万博」

—これまでの万博の常識を超える「つながりあう万博」

- 大阪・関西万博は180日間のイベントだけでなく、「過去×現在×未来」をつなぎ(超「時間」)、「大阪会場×関西×世界」をつなぎ(超「会場」)、2020年から数えて「万博前5年×万博2025×万博後5年」の10年間がつながりあう(超「会期」)万博とする。
- 「世界はひとつ、世界はつながる」を目指し、これまでの人類のさまざまな技術と文化の伝播・つながりを世界各国からの参加で体感いただき、世界とのつながりの形と未来の姿を示す。

⑤ 「大阪・関西万博2025」を象徴して、ずっと生き続けるシンボルづくり

- 「日本的なるもの」をつくり続けた大阪・関西・日本を象徴する「日本の聖地」をソフト・ハードを構築して将来につなげていく。
- 万博のシンボルをつくる。大阪・関西——通天閣、そして太陽の塔からアマテラスタワーへ。



多様な専門分野から参加者が集い、それぞれの知見から自由な発想で万博を語り合う。継続的な意見交換が新たな万博像を創出する。写真提供/ナレッジキャピタル

で盧舎那大仏像完成を記念して行われた開眼供養会をAI・ロボットを使ったミュージカル形式で再現するというアイデアが寄せられました。開眼供養会では、唐楽、高麗楽、林邑(ベトナム周辺)楽などの国際色豊かな数々の舞楽が奉納され、「雅楽」として現代に承継されていますが、そうした世界との交流の歴史的瞬間を最新技術をもって再現できたら面白いだろうと感じています。

ほかに、「50年後、100年後を見つめ



1912(明治45)年、第5回内国勸業博覧会跡地にルナパークとともに建設された初代通天閣。写真提供/MeijiShowa/アフロ

たプロジェクト——未来の種をまく『ミライプロ』と題し、かつて70年万博を見た子どもたちにとって、そこで得た感動がその後の力になったように、「大阪・関西万博2025」で、今の子どもたちに夢を与え、未来をつくるきっかけになるアート・カルチャー・サイエンス・テクノロジーをテーマとしたコンテンツづくりやメディア開発を行うというアイデアもありました。

私自身、70年万博開催時は小学校5年生、



70年万博当時、太陽の塔はお祭り広場の大屋根から塔の上半分が突き出すように建っていた。写真提供/Picture Alliance/アフロ

会場には何度も通いました。外国人がたくさんいて会場内のお祭り広場で毎日踊っていてとても明るい場だったという印象があります。今回の万博も、「大阪・関西・日本が面白い」というメッセージをこめながら、次世代にとってよい刺激とも、将来の力となる場を目指したいと思っています。

「大阪・関西万博会議」ワイガヤサロン」は今後も継続的に開催します。ほかにも万博に関連したイベントが随時行われていく予定です。

これまでの万博をどう「超」えるかを盛りこみながら、大阪・関西の地で世界各国・地域間が「交流・融合・混じりあつてきた」プロセスを実感できるような方法論や、次の時代へあるべき姿・展開を提案しています。

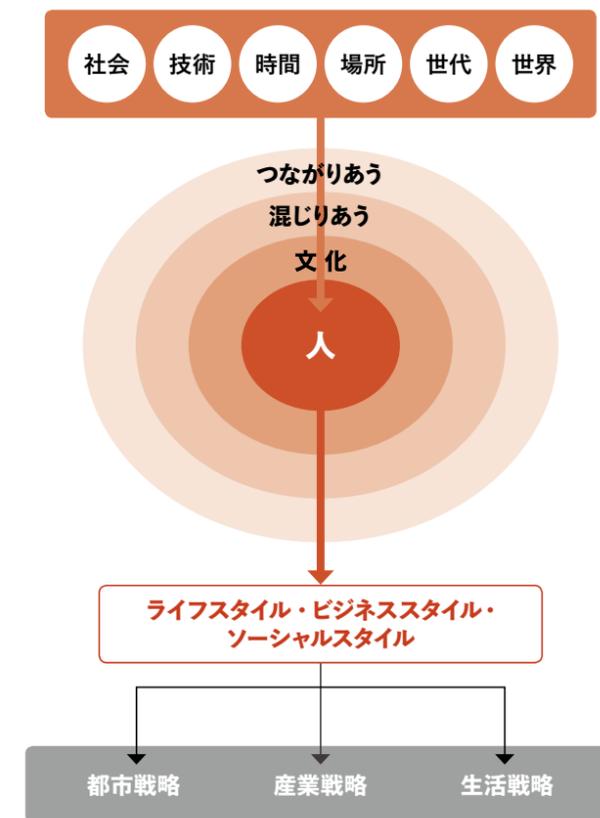
ここで大事になってくるのは、技術と実社会を「どう結び付けていくか」ということ。技術そのものは進化していても、それが人と社会と乖離している事象が増えています。技術は社会に貢献してこそ意味があるものです。そして、それらをつなぐものは、「洗練する、繰り返し」が本来の意味である「文化」であることを忘れてはいけません。これまで繰り返しお話ししてきた、デンマークのデザインスクールのCEOであるシモーナ・マスキ氏が語った「技術と社会をつなぐのは文化である」という言葉は、万博が目指すものの本質的なコンセプトともなっているとあらためて感じています。

5つの提案のなかで、唯一「超」の単語が入らない⑤については、議論のなかでこうしたシンボルが要るだろうと考えました。第4回パリ万博でのエッフェル塔、京都での第4回内国博における平安神宮、大阪の第5回内国博跡地開発でつくられた通天閣、そして70年万博での太陽の塔など、シンボルとしてタワーなどがつくられてきたのは、その時代の人々の心および技術を結集する最適な表現方法であったという側面もあります。

そこで「大阪・関西万博会議」ワイガヤサ

ロン」でも、日本の聖地巡礼の場、未来への灯台としてタワーをつくるというプロジェクトを提案しました。名称は天を照らすという意味をこめて「アマテラスタワー」、建設場所として生駒山の山頂をあげています。なぜ生駒山かというと、大阪が大阪湾と瀬戸内海、生駒山と六甲山に包まれた地であり、北に京都・滋賀・福井、南に奈良・和歌山、東に三重・岐阜・愛知、西に兵庫・四国と東西南北を見晴らすかす地であるからです。山頂から見る夕日の美しさはたとえようもなく、また会場となる夢洲からも見えます。日本的なもの原風景の生駒山山頂に、安寧、安全、

■図:「交流」と「混合」から生まれる新たなスタイル



「史上No.1の万博『超万博』に向けた5つの考え方」では、それぞれの提案もあげています。たとえば、④に関連したものでして、752(天平勝宝4)年に奈良・東大寺

安心、防災、日想観など祈りの場であり、また聖地巡礼の場、観光地として、土木・エンジニアリング、情報や環境、モビリティ、エネルギー、リアフリーなど日本技術を結集させてつくるシンボルタワーとなるのではないのでしょうか。

次世代に夢を与え、力となる万博に

奈良の倭の奴の国宝

文 哲夫 (笑い飯)
Tetsuo (Wairimeshi)

画 浅妻健司

これは、みなさんの共感を得られるであろうとの自信に基づいて提言することなんです。地元がいいですよ。大好きですよ。そんなことないですか。奈良出身だからでしょうか。自然があるからでしょうか。なぜか地元が好きでたまらないんです。地元に戻りたいという気持ちも、年々高まっています。例えば、「奈良なんかなんもない」という讒言(ざんげん)を聞いて育ちました。子供の頃は確かに、奈良は海もないし、空港もないし、背の高いビルもないしと、都会やドラマとの格差に嘆息をもらしていたかもしれません。しかし今から振り返れば、あの大人たちの讒言は、ただ遠慮がちな人が奈良のことを卑下して言っただけやん、と確信できるのです。つまり、奈良にはなんもないことなく、なんやかんやあるのです。

まず古墳があります。日本史の教科書で、一番初めに出てくる航空写真といえば、古墳ではないでしょうか。しかも、先日、世界遺産に登録されました粟や百舌鳥(ももぢり)の古墳群よりも先に登場するのが、奈良の箸墓古墳(はしむす)なのです。箸墓古墳は、古墳時代初期の築造であり、巨大な前方後円墳では最古のものとも伝えられています。教科書に掲載されるのも納得できます。個人的にはこれが誇らしくて誇らしくて、しよ

うがありませんでした。なぜなら、その航空写真には、うちの畑が写っているからです。

次に、美しい川があります。山に蓄えられた水源は、自然の浄水器を通して川の上流から下流へと流れています。また、先人たちの努力による灌漑のおかげで、奈良の平野部にもその美しい水が流れ込んでおり、その水に育てられた稲穂には、無類の米が実るわけですから、めちゃうまいご飯が炊けます。おにぎりにしてみても、抜群にそのよさが伝わると思います。

また、川のほとりでやるバーベキューは楽しいですし、釣りもできます。釣れた鮎(あゆ)やアマゴを炭で焼くと、ビールをおかわりしたくなります。川面は日の光をいつも上手に跳ね返っていて、一回くしゃくしゃにしてから広げてみたアルミホイルのように輝いています。片手にビール、もう一方の手に魚の串、周りを伺うと、おにぎりがまだあと少し残っていて、最高の歓声を上げるわけです。

あと奈良の大事な存在として、ラーメン屋があります。ラーメン屋ならどこにでもあり失笑されるかもしれませんが、奈良には、やばいくらいおいしいラーメン屋があるのです。また近年では、県内のいたるところにラーメン屋が立ち並び、激戦区を形成するほどになっています。しかし、全国的にみると奈良におけ

るラーメン屋の店舗数は少なく、人口10万人あたりのラーメン屋店舗数というデータで見ると、47位、なんと全国最下位になります。だからすごいんです。まずい店がまず「ない」という結論に至るのです。しかも、奈良には古(いにし)から三輪(さんりん)そうめんという名産があります。そうめんはそうめん(そうめん)で日本一の味とコシを誇っています。それなのにまだ、ラーメンでも日本一になろうとしているのです。

おそらく、三輪(さんりん)そうめんのおかげで舌を上等にさせた奈良の少年少女が、麺類(めんるい)の虜(こぼ)となり、その追求によって生まれた傑作が、奈良の極上(ごくじやう)ラーメンとなったのでしよう。ラーメンの上部やスープには、大和野菜やヤマトポーク、大和肉鶏(おほむねとり)などが各々のポテンシャルを発揮している場合もあります。

大和牛(おほむね)もあります。その起源を遡れば、神武天皇が大和国(おほむくに)で牛肉(ぎゅうにく)を食したと思われる記述も残るほど、歴史のある食肉(じき)です。

また昨今、あちこちで姿を消していくのが、遊園地(遊園地)です。ディズニランドやUSJなど、海外産のテーマパークに人口が集中してしまった産業において、日本産の遊園地(遊園地)はもはや国産牛肉(こくさんぎゅうにく)に並ぶ上質感(じやうしんか)がありません。さて、奈良には生駒山(なまがま)遊園地(遊園地)があります。見晴らしのいい山の頂(いただき)に、花(はな)が咲(さ)き誇る見事(みごと)なテーマパーク(テーマパーク)が根強く君臨(きんりん)しています。

奈良健康ランド(奈良健康ランド)もあります。健康(けんこう)になれるのはもちろん、遊具(遊具)もたくさんあります。吉本新喜劇(吉本新喜劇)もやっています。

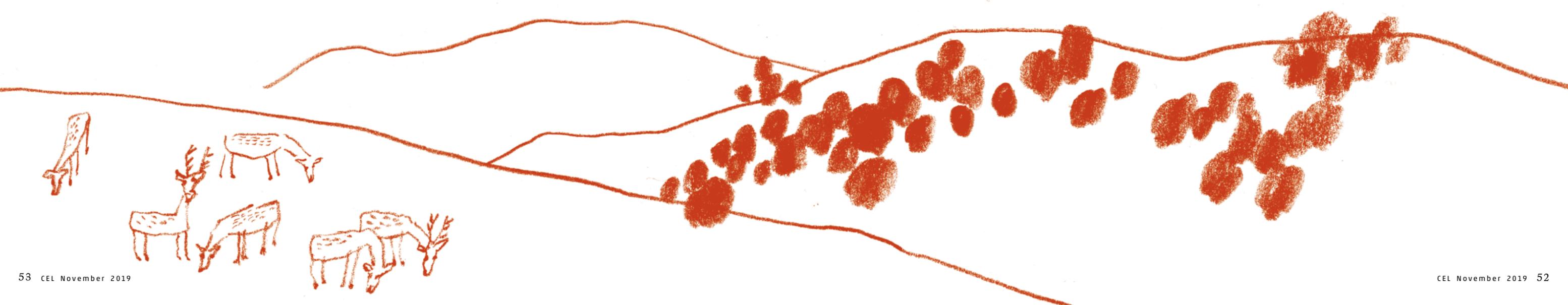
ここまで、奈良の魅力を並べさせていただきました。読者(よめい)のみなさんにお伝えすることによって、少しだけ地元(地元)に恩返し(おんがへし)ができたかなと思っております。ではここから、奈良(奈良)以外のいろんな地域(ちいき)にできるだけ恩返し(おんがへし)をします。

箸墓古墳(はしむす)の航空写真(航空写真)を載せてくださっている山川出版(山川出版)社(社)さんは、東京(とうきょう)に本社(ほんしゃ)を構(か)える出版社(しゅつぱんしゃ)さんです。東京(とうきょう)のおかげで、奈良(奈良)の古墳(こふん)が全国(ぜんこく)に紹介(しょうかい)していただけました。

雨(あめ)となつて奈良(奈良)の山々(さんざん)に降り注(つ)いだ水(みづ)は、和歌山(わかやま)など南方(なんぽう)の県(けん)から上昇気流(じやうじきりゅう)に乗(の)って運(は)られてきた水(みづ)だったかもしれません。おにぎり(おにぎり)にしても、海(うみ)のある都道府県(とどうふけん)から塩(しほ)と海苔(のり)をいただき、それら(それら)と融合(りゆうごう)させていただきました。こと(こと)によって、奈良(奈良)の米(こめ)を引き立て(ひきだて)ていただきました。

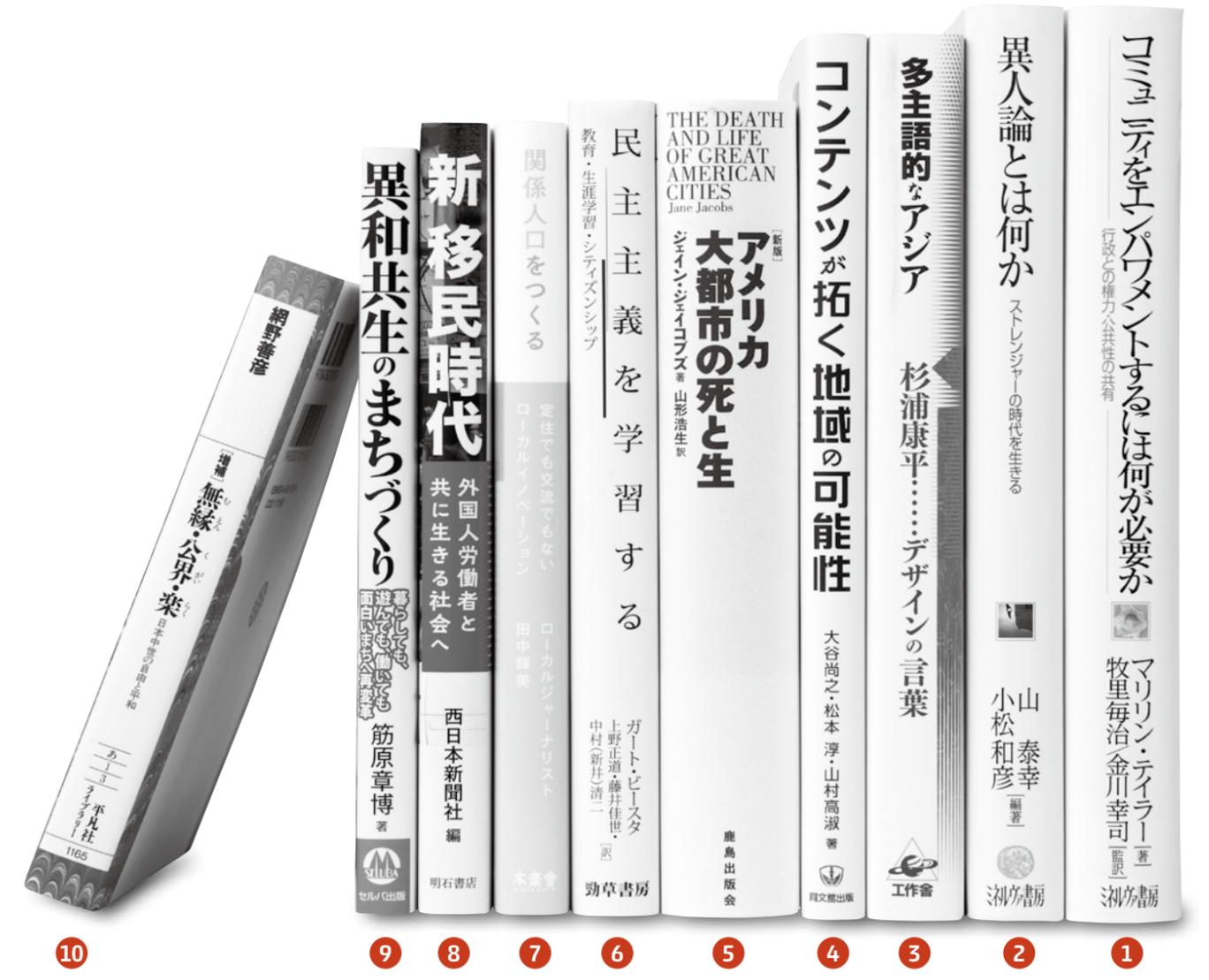
また、ラーメン(ラーメン)、野菜(やさい)、豚肉(とんこく)、鶏肉(とりこく)、牛肉(ぎゅうにく)と、京都(きょうと)や兵庫(ひょうご)などで培(つちか)われたアイデア(アイデア)は、奈良(奈良)の食文化(じきぶんか)をも向上(じやうじやう)させてくれたこと(こと)でしょう。大阪(おさか)のUSJ(USJ)は遊園地(遊園地)の最高傑作(さいこうかくさく)ですし、滋賀(しが)のニユーびわこ健康サマーランド(ニユーびわこ健康サマーランド)のように、いろんな地域(ちいき)に優れた施設(せし)があります。みなさん(みなさん)の地元(地元)って、最高(さいこう)ですよ。

てつお 漫才コンビ「笑い飯」のボケ・ツッコミ担当。
1974年奈良県生まれ。吉本興業所属。第10回M-1グランプリ2010優勝をはじめ、数々の受賞歴あり。2012年には奈良市観光特別大使に任命され、寺社や古墳を中心に奈良県の魅力を発信するなど幅広く活躍している。



地域と時間をつなぐ 「よそ者」の役割を考えるための10冊

「内や外」「過去と現在」をつなぎ、地域やコミュニティのより良い形を考えるため、「よそ者」の役割を見直すことは何らかの手がかりになるのではないのでしょうか。今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。



6 『民主主義を学習する』
——教育・生涯学習・シティズンシップ——
著者は世界的な注目を集めるオランダの教育哲学者。公共的な事柄に積極的にコミットし、異なる意見を持つ他者と共に社会を形成する「政治的主体」を育むためのシティズンシップ教育のあり方が説かれる。コミュニティを築くうえで欠かせない、市民性のあり方を見直す一冊となる。
ガート・ビースター=著
上野正道、藤井佳世、中村(新井)清二=訳
勁草書房／2014年



7 『関係人口をつくる』
——定住でも交流でもないローカルイノベーション——
「過疎」という言葉の発祥地とされる島根県。自らをローカルジャーナリストと名乗る筆者が、自身の出身地でもある島根県に向き合うなかで、「関係人口」という新たな潮流に光を見出した経緯が丁寧に綴られている。関係案内所「しまコトアカデミー」のあり方や、関わるキーパーソンたちの役割など分かりやすく解説される。
田中輝美=著
木楽舎／2017年



8 『新移民時代』
——外国人労働者と共生する社会へ——
アジアの玄関口である九州のブロック紙・西日本新聞で、2016年12月から展開されたキャンペーン報道「新移民時代」が一冊に。すでに立派な移民「当事国」となったこの国で暮らす外国人の実像や、彼らなしでは成り立たない日本社会の現実をあぶりだし、さらなる議論の深化と具体的方策の道筋を示す。
西日本新聞社=編
明石書店／2017年



9 『異和共生のまちづくり』
——暮らしても、遊んでも、働いても面白いまちへ再変革——
今号で紹介した「ヨリドコ 大正メイキン」にも関わる名物区長(元大正区・現港区)による著書。大阪に明治期以降根付いた沖繩文化と元からある大阪文化との異文化対立や、新興勢力と既存勢力の軋轢など、さまざまな対立構造こそが活性化を阻害しているとし、異和共生を唱え問題を解消していく。地元への熱い想いも伝わる良著。
筋原章博=著
セルバ出版／2017年



10 『[増補] 無縁・公界・楽』
——日本中世の自由と平和——
日本史における新たな中世像を構築するとともに、民俗学・文化人類学が中心だった「異人論」研究に、歴史学からの視座を提供した決定的一冊。あえて既成の社会集団と縁を切った漂泊民、内と外の境界にあって行き場のない人びとのアジュールとなった自治都市・縁切寺など、本書で発見されたテーマは今も新鮮な驚きに満ちている。
網野善彦=著
平凡社ライブラリー／1996年



1 『コミュニティをエンパワメントするには何が必要か』
——行政との権力・公共性の共有——
世界各地の事例を取り上げながら、コミュニティをめぐる問題を考察。そのうえで著者は、コミュニティの可能性は社会的包摂にあると見定め、その実現に向けた、国家や行政と共存するコミュニティを構築するための道程を示している。
マリリン・テイラー=著
牧里每治、金川幸司=監訳
ミネルヴァ書房／2017年



2 『異人論とは何か』
——ストレンジャーの時代を生きる——
日本の思想界に“異人旋風”が吹いて30年あまり。かつての理論的蓄積を土台に、若手研究者が民俗学、歴史学、文学、社会学、心理学、メディア論、経済学といった幅広い視点から異人論を掘り下げる一冊。異人=よそ者を脱構築的に問い直す各々の手際は、この分野の豊かな到達と尽きせぬアクチュアリティを物語る。
山泰幸、小松和彦=編著
ミネルヴァ書房／2015年



3 『多主語的なアジア』
(杉浦康平デザインの言葉)
日本のグラフィックデザイン界を牽引してきた杉浦康平の執筆、対談などをまとめたシリーズの第1弾。今号でも語られている「多主語的」というキーワードをアジア各国の図像から読み解き、その意味を提示している。西欧的な価値観のオルタナティブとしてのアジアー日本の美意識を考えるうえで、著者の言葉は大きな指針となる。
杉浦康平=著
工作舎／2010年



4 『コンテンツが拓く地域の可能性』
——コンテンツ製作者・地域社会・ファンの三方良しをかなえるアニメ聖地巡礼——
著者によれば、アニメ聖地巡礼による「三方良し」の実現は、意外に難しいという。その課題解決の視座を当事者それぞれの立場から描写。よそ者であるファンと地域との間で、関係人口という絆が育っていくプロセスを、理論的な背景とドキュメンタルな事例研究を通じて立体的に構成する。
大谷尚之、松本淳、山村高淑=著
同文館出版／2018年



5 『[新版] アメリカ大都市の死と生』
1950年代のアメリカの建築、街区、都市開発の事例を、市民活動家でもあった著者ならではの内的視点で考察しつつ、近代都市計画への批判を展開。都市とは明らかに複雑に結びついている有機体であると説き、その多様性の魅力に言及する理論はそれまでになく、都市論の古典とされている。都市の魅力の源泉である賑わいとコミュニティの役割を明確に示しており、現代にも十分通じる。
ジェイン・ジェイコブズ=著 山形浩生=訳
鹿島出版会／2010年



浪花の十二月

「大阪くらしの今昔館」が所蔵する、大坂生まれの浮世絵師・二代長谷川貞信(1848～1940)が描いた月ごとの大坂の行事と風景の画帖から、とくに見ごたえのある場面を紹介します。

(二代長谷川貞信「浪花行事十二月」「浪花風景十二月」より)



1月 睦月 むつき

今宮十日恵比寿

「いまみやとおかえびす」

毎年正月10日、今宮社は福を祈って詣でる人々にぎわった。境内では米俵や白銀包などの縁起物が売られ、参詣客はそれを買って笹の枝に結びつけ持ち帰るのが習わしであった。芸者衆を乗せて繰り出すパレード「宝恵駕籠」も祭礼を華やかに彩った。



11月 霜月 しもつき

番船

「ほんせん」

新綿や新酒を積んだ番船は、大坂から江戸へ到着する早さを競った船のレースであり、その年の相場にも関わるため重視された。本図では安治川岸の切手場に切手(参加証)を受取りに来た船頭の乗る上荷船と、それを見物する多数の屋形船や住吉講など群衆の祭騒ぎの様子を描いた。



2月 如月 きさらぎ

早春の梅屋敷

「そうしゅんのうめやしき」

文化初年のころ、高津神社の東側、今の城南寺町のあたりに江戸の亀戸梅屋敷を模して梅林を植え、梅屋敷が開かれた。如月の梅の盛りの頃は多くの人たちが繰り出し、連歌・俳諧・狂歌、演奏や踊りも楽しんだという。のちに、菊の頃にも花壇を設けて春秋ともに賑わった。



12月 春待月 はるまちつき

顔見世芝居

「かおみせしばい」

歌舞伎の年中行事。一年一度の役者の交代のあと、新規の顔ぶれで行う最初の興行のこと。大坂では12月に行われた。手打連中という、今でいう役者のファンクラブがあり、進物を送り、揃いの頭巾をかぶって手を打って祝った。連中は資産家の粹人たちで、町人が芝居文化を支えていた。

CELからのメッセージ

「よそ者」の受容度が、日本の将来を左右する?

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
所長 田中雅人 Tanaka Masato

「よそいきの服」、「よその家」、「よそよそしい」……。 「よそ=余所・他所」とは「自分の属している家庭や団体以外のところ。自分とは関係のない所、人、物」のことで、この「よそ」という言葉を聞くと、ネガティブな印象を受ける方がおられるかもしれないが、これからの日本のまちづくりにとって、「よそ者」は地域と時間をつなぐ役割をもつ者として、その活躍が大いに期待されている。

「よそ者」が活躍する例として、シンガポールをご紹介したい。1965年に、マレーシアから追放される形で独立を余儀なくされた小国は、インドネシアなど近隣の列強から身を守ることに加えて、資源のない国土での発展をはかるため、関税なしの自由貿易の推進など、徹底した外国企業の受け入れをはかった。国土面積が東京都23区と大差はなく、人口が600万人弱にもかかわらず、世界競争力ランキングでは第1位[*]という地位を築くまでに成長した主因は、外国人・企業という「よそ者」の受容度の大きさだと思う。

日本も明治維新において、鎖国をやめ、西洋文化=「よそ者」の受け入れを積極的にはかったことにより、列強に名を連ねるようになった歴史がある。つまり、「よそ者」を受け入れる時、国や地域が大きく発展するように思う。

では、なぜ、「よそ者」を受け入れ、彼らが闊歩する時、発展するのか。「よそ者」は、余所の世界も知るため「ウチ」と「ソト」の両方の視点・観点を有しており思考がダイバーシティに富むこと、「ウチ」に存在するつまらぬ慣習などに縛られないこと、そしてハングリーさを持ち合わせていることがその理由なのだろう。

人口減少がいよいよ社会の大きな課題となる、これからの日本にとって、「よそ者」の受容度をどこまで引き上げられるか、また受け入れた「よそ者」と地元民がコラボレーションすることで、いかにハイレベルなパフォーマンスを発揮できるかが、この国の将来を左右する大きなファクターになるのではないだろうか。

* 世界経済フォーラム(WEF)2019年発表

CEL ホームページ

<http://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容や情報誌「CEL」バックナンバーをご覧になれます。
※CEL ホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

Facebook ページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

volume123
November 2019

特集
地域と時間をつなぐ
—「よそ者」の役割とは

2019(令和元)年11月1日発行

発行 大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人 田中雅人

企画・制作 熊走珠美

編集人 日下部行洋

編集 ㈱平凡社

アートディレクション
& デザイン okamoto tsuyoshi +

校正 ㈱アンデパンダン

印刷・製本 ㈱東京印書館

お問い合わせ窓口 大阪ガスビジネススクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2019 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複製
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

